

I S ／ M S

ジャスティ一☆

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ドゴス・ギア級2番艦『ゼネラル・レビル』に続き、一ヶ月後に進宙式を控えていた  
ドゴス・ギア級3番艦『ペガサス・コーウェン』。

4個MS大隊を載せ試験航行をしていた際に通信不調で味方からの警告を受信でき  
ずにコロニーレーザーの射線に侵入してしまった。

インダストリアル7に向けて発射されたレーザーに巻き込まれて帰らぬ戦艦となつ  
てしまつた。

しかし、消滅していた筈の『ペガサス・コーウェン』は健在、搭乗員やMSも同様消  
滅していなかつた。

助かつたのかと誰もが思つていたがそうではなかつた。

宇宙にいた筈の『ペガサス・コードエン』は太平洋のど真ん中で浮上していた。  
状況が掴めない『ペガサス・コードエン』の艦長、ユウ・カジマ大佐達は艦護衛の為  
MSを出撃させ戦闘態勢に移行する。

ここがインフィニット・ストラatosの世界であることを知らずに・・・。

# 目 次

ドゴス・ギア級3番艦 ウエン ※プロローグ 太平洋のど真ん中で 空を駆けるMS、海に浮かぶ戦艦	ペガサス・コー 歓迎の握手 置かれている状況、迫り来る嵐 特攻してくる野菜とMS	9 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1	1 1 1 1
空に浮かぶ女神、急かされる選択 巨人を前にした女神が怯える 存在を消された女神、激変する世界 事態が全世界に知り渡る そびえ立つMS、足元での会話	28 28 28 44 44	35 35 35 52 60	135 143 158 164	135 143 158 164	126 114 96 87	105 114 96 87	74 74 74 74	65 65 65 65	パイラットの怒り、女神の涙 別世界の人間との接触 歓迎の握手 置かれていた瞬間豪雨の中を駆ける 特攻してくる野菜とMS ニユータイプと告げられた彼 本来の用途から外れたIS、戦争の為に 造られたMS 答えを見つけた彼女は決意する ペガサス・コーウエンの裏表、そして本来 の姿 隠れた研究所に銀髪の少女

遠くなる島、それを眺める少女

|

173



# ドゴス・ギア級3番艦 ペガサス・コーワエン ※プロローグ

## ローブ

第二次ネオ・ジオン抗争から3年後の宇宙世紀0096年。

インダストリアル7でラプラスの箱を巡つて戦闘が行わされている中、発射態勢が整つているコロニーレーザー、『グリップスII』から少し離れた所で大型戦艦、ドゴス・ギア級3番艦『ペガサス・コーワエン』が試験航行をしていた。

『ペガサス・コーワエン』は2番艦である『ゼネラル・レビル』の後に続いて一ヶ月後に進宙式を控えている大型戦艦だ。

ティターンズ崩壊によりドゴス・ギア級戦艦の建造は凍結されてたが、連邦軍再編計画で2番艦『ゼネラル・レビル』が建造された。

3番艦『ペガサス・コーワエン』は建造途中で凍結されていたが、2番艦『ゼネラル・レビル』はフル・フロンタルが操るMS、シナンジュによる単機での攻撃により損害を受け、急速建造途中であつた3番艦『ペガサス・コーワエン』を完成させ予備の大型戦艦として誕生した。

その誕生から1週間後、最終的な試験と調整の為実際に4個MS大隊を載せて試験走

行を行つてゐる。

そして、3番艦『ペガサス・コーウエン』の艦長を務めるのは・・・一年戦争時に蒼い死神と呼ばれたMSのパイロットだった、ユウ・カジマ大佐である。

ユウ・カジマは初の艦長勤務で早速壁に当たつてしまつた。

「・・・困つたな、通信は未だに不調か?」

「はい、出港してから通信が全く繋がりません」

「これでは航行できない・・・仕方がない、進路を変更して帰還しよう。試しに1機のMSを起動させ通信が使えるかやつてみれくれ」

「り、了解!」

通信オペレーターは緊張しながらコンソールを操作する。

ここにいるオペレーター達は卒業したての新人。

上層部からは、試験航行と同時に今後戦艦のクルーとして勤務するため実際に戦艦を動かす訓練もかねて任務を遂行せよと命令されており、ユウ・カジマも初の艦長勤務としてこの任務に参加している。

分からぬところがあれば階級関係なしに助け合う、前線で戦う戦艦クルーとしてはまだ新米だ。

だがこんな雰囲気も嫌いではない、むしろベテランのクルーの中に一人新米が入ると

いつた気まずい雰囲気よりはマシだとユウ・カジマは感じていた。

だが今はそれどころではない。

通信が一切繋がらないまま広すぎる宇宙を航行するのは自殺行為に匹敵する。迷つたら最後であるのがこの宇宙なのだ。

何よりも、艦長であるユウ・カジマは1500人強の乗員やMSパイロットの命を預かっている。

こんな所で、ましてや戦闘も起きていないのに死なせるのは絶対にあつてはならぬい。

ひとまずユウ・カジマは戦艦の不調で帰還することを選択した。

MS格納庫では1機のMS、RGM-89S スターケジエガンが起動していた。コックピットの中でタッチ式のモニターを操作しているのはこの機体のパイロットである、ゲン・タチバナ少尉だ。

彼は先ほど、艦長命令でMSによる通信を試みよと言われ、それを行つてゐる最中だ。コックピットハッチには数名の整備員がパソコンを使って機体を調整をしてゐる。「調整完了、タチバナ少尉」

「了解」

整備員の合図でモニターを操作し、通信を試みる。

「こちらノーベンバー3、ペガサス・コーウェン応答願います」

数秒後、艦橋から通信が帰ってきた。

「こちらペガサス・コーウェン。ノーベンバー3、感度良好です」  
「こちらも感度良好です」

整備員にグッドサインを出す。

整備員はインカムで艦の通信機を調整している整備員と話始める。

〈タチバナ少尉〉

通信モニターが表示され、この艦の艦長であるユウ・カジマ大佐の顔がモニターに映る。

艦長直々に通信が来たので驚いてしまう。

「か、艦長？」

「ん？ 驚かせてすまない、すまないがそちらで月のフォン・ブラウンにいる寮艦に通信を試みてくれ」

月のフォン・ブラウンには寮艦であるクラッップ級巡洋艦『ズール』が駐留している。本来なら試験航行に同行するはずだったが、古い事もありエンジントラブルが発生しフォン・ブラウンで修理を行つてゐる。

「了解、やつてみます」

モニターを再び操作し、  
寮艦に通信を行う。

「こちら、ペガサス・コーウェン所属ノーベンバー3。ズール、応答願います」

応答がない。

もう一度呼び掛けてみる。

「こちらノーベンバー3、ズール応答を」

.....

返事が帰つてくることはなかつた。

仕方ないと溜め息をつきながら艦長に通信を繋ぐ。

「こちらノーベンバー3、艦長駄目でした。恐らく通信圈外かと思われます」

「了解した、整備班によれば艦の通信機材は故障していないそうだ。多分通信圈外に出てしまつたのだろう。あとは休んでくれ、タチバナ少尉」

「了解、通信終わります」

通信を切断する。

休めとは言われても十分睡眠はとつたし、消灯時間までやることがないのでスタークジエガンの調整でもするかと考え、そのままコックピットの中で機材を操作する。

「なんだ調整か？手伝うぜ」

「助かります」

整備員と交渉をしながら機体の微調整を開始した。

艦橋ではユウ・カジマがクルーに指示をしていた。

「本艦はこれより帰還する。襲撃ないとは思うが警戒しながら前進する。通信オペレーターは通信圈内に入つたら寮艦に通信で呼び掛けてくれ。さあ、帰ろう」

クルーは彼の指示通りに動き出した。

フォン・ブラウンに着くまでは時間がかかると思ったユウ・カジマは艦長席に座る。ドリンクホルダーにある飲み物を取り、飲もうとしたその直後・・・。

「ツ!!艦長、7時の方向から高エネルギー反応を感知!!」

「何ツ!?すぐに回避だ!!」

「ま、間に合いません!!高エネルギー接近!!」

オペレーターが高エネルギーの接近を知らせると、宇宙一面が一気に明るくなる。ユウ・カジマは背筋が一気に凍りついた。

彼はこの光を知っている。

そう、この光は・・・コロニーレーザーの光であることを。

「馬鹿な・・・なぜアレが・・・!?」

気づいたときには視界が真っ白になり、彼は意識を失った。

コロニーレーザーが発射される数分前。

M S格納庫でゲン・タチバナはスタークジエガンの微調整を実施していた。しかし、スタークジエガンのセンサーが高エネルギー反応を感じし、パイロットに警告を促し始める。

「高エネルギー反応!? 敵が来たのか!？」

命令は出ていないが戦闘になる。

パイロットスーツを着用しないままゲン・タチバナはコツクピットのハッチで作業していた整備員を待避させ、コツクピットハッチを閉じる。

スタークジエガンが唸りをあげて起動し、パイザーに光が灯る。

すると同時に視界が急激に明るくなる。

この瞬間、ゲン・タチバナは絶望する。

ビームか何かが戦艦に直撃したのだろう、装甲が焼けていくような感じがしたのだ。

「そんな馬鹿な・・・!?」

視界が真っ白になり、ゲン・タチバナはその言葉を最後に意識を失った。

この時、ドゴス・ギア級3番艦『ペガサス・コーヴエン』はインダストリアル7に向けて発射されたコロニーレーザーに飲み込まれ、一瞬で存在そのものすべてを消されて帰らぬ戦艦となつた。

# 太平洋のど真ん中で

誰かの声が聞こえる。

ユウ・カジマはこの声に聞き覚えがあつた。

一年戦争時、蒼い死神と呼ばれたRX-179BD-1、ブルーデステイニ-1号機のパイロットとして、ニムバス・シユターゼンが操るEXAMを搭載したイフリート改と激戦を繰り広げている時。

大破した2機の次にユウ・カジマはブルーデステイニ-3号機、ニムバスはブルーデステイニ-2号機に乗り換え激闘の末に大破。

あの時に聞こえた少女の声だ。

名前はたしか・・・マリオン。

一覚えててくれたのね、ユウ・・・

(ここは・・・どこなんだ? それになぜ君が? あの時君はEXAMから解放されたはず・・・)

「ええ、私は確かに解放された・・・貴方のおかげでー

(ではなぜここに?)

—もう貴方に会えないから・・・

(会えない?・・・。どうか俺は・・・死んだのか)

ユウ・カジマはある時コロニーレーザーによつて戦艦ごと飲み込まれ消滅した。

死んでしまつたからもう会えないのだろう。

—死んでなんかいなゐわー

(死んでいない?・どういうことだ?)

—貴方は・・・いいえ貴方達は別の世界に流れてしまつたのー

(別世界?何をいつているんだ・・・意味が分からない!)

—でも事実なの・・だからユウ、もう貴方には会えない。遠いところに行つてしまつた貴方に会いに行けないの・・・

(そんな・・・もし別世界に流れたとして、俺は一体何をすればいいんだ?)

—貴方の心に従えばいい・・・

(俺の心に・・・従う?)

—そう、貴方がやりたいことをやればいいのー

(・・・・・)

—ここから先は貴方次第

(・・・分かつた)

「私を解放してくれてありがとう、貴方のこと忘れないわー

(忘れるものか、俺は君にたくさんのこと教えてられた。あの光のことも……  
うん、それじゃ……さようならー

(ああ……今度こそさようならだ、マリオン……)

互いに別れあつた瞬間、ユウ・カジマは再び暗闇に飲み込まれた。

再び誰かに呼ばれている。

さつきと違い、体が重く感じる。

この感覚……俺は生きているのか?

「……長!!……カ……マ艦長!!」

視界が段々広がつてくる。

少しづばやけているが、少しすると視界は完全に復活した。

「艦長!!」無事で……」

俺はクルーに囲まれて床下で横になつていた。

「生きて……いる?」

「はい、我々は生きています!」

重く感じる体を無理矢理立たせる。

まだ少しフラつくが、これくらいの程度なら大丈夫だ。

「状況は？」

「艦に損傷等の異常はありません、機材もすべて正常です」

「艦長が気を失っている間、勝手ではあります。が独断でMSによる偵察を行っています」

「いや、いい判断だ。それで、何か分かったのか？」

「……」

この質問でクルーは皆静まり返ってしまう。

というより、何か言いづらそうな感じだ。

「どうした？」

「艦長、直接目で見た方が分かりやすいかと。こちらへ」

そういうつてクルーに案内されたのは艦橋の窓だ。

窓から見える光景を目にしたユウ・カジマは絶句した。

なぜなら、ペガサス・コーワエンは海の上に浮かんでいるからだ。

カタパルトにはスタークジエガンとジエガンD型の数機が立っていた。

「通りで重力を感じたわけだ……」

「我々がなぜ地球にいるのか全く分からず、この通り飛行性能を持たないジエガンでは偵察もままならず……。それにあの時我々は……」

「ああ、焼かれていた。コロニーレーザーにな」

それを聞いたクルーは一気に顔を青ざめた。

自分達がコロニーレーザーに焼かれたことに驚いている。

当然だ、何の前触れもなく撃たれたのだから。

「スタークジエガンに乗っているのは？」

「は、ノーベンバー3のタチバナ少尉です」

話によれば彼は撃たれる直前にMSに搭乗し、起動した瞬間に意識を失っていたらしい。

そして先に目を覚ましたのがタチバナ少尉であり、MSもすぐに動ける状態だったのです。真っ先に偵察に出たようだ。

「ノーベンバー3に連絡はできるか？」

「はい、繋ぎますか？」

「頼む」

ユウ・カジマは艦長席に座り、テンキーを操作し受話器を手に取り、耳に当てる。

「ノーベンバー3、聞こえるか？」

「艦長？ご無事で！」

「心配をかけた、偵察して何か分かつたことはあるか？」

「申し訳ありません、重力下での飛行ができない機体なので今はこうしてカタパルトの上で立つて周囲を確認することだけしか・・・」

「分かっている、小さなことでもいい。何か変わったことはあるか？」

「艦長？・・・そういえばGPS通信を拾つたのですが、地図に違和感を感じるんです」

「地図に違和感？転送してくれ」

〈了解〉

通信モニター越しでタチバナ少尉はデータ転送を実施する。

数分もかからずにデータが転送されてきた。

それを艦橋のメインモニターで表示する。

そこでユウ・カジマ達は信じがたいものを目にした。

それはオーストラリアだ。

一年戦争の発端である、ジオン軍によるコロニー落とし。

落とされたコロニーはオーストラリアのシドニーに直撃し、それ以降地図には巨大な穴が開けられた状態で記されていた。

だが今はどうだ、オーストラリアにあるはずの巨大な穴、コロニーの落ちた場所が表示されていないのだ。

ユウ・カジマは確信した。

マリオンという少女に語られた、別世界へながされたという事実が。だとしたら状況は最悪だ。

別世界なら、恐らく地球連邦軍やジオン軍は存在しないことになる。つまり・・・艦の修理や補給が一切行えないということだ。もちろん、MSもそれに含まれる。

ユウ・カジマ達は・・・命綱のない状態で別世界に存在してしまっているのだ。

「・・・艦長」

クルー達が自分達はこれからどうしたらしいのかという顔をしている。新米である俺たちにいきなりこの絶望的な状況は最悪だ。

だがユウ・カジマ諦めなかつた。

彼は立ち上がり、即座に命令をする。

「こうしていても仕方がない、艦内にいるすべての乗組員とMSパイロットに通達！ 第1戦闘配備だ、整備大隊には申し訳ないが、すぐにMSを重力下で稼働できるよう調整を急がせてくれ。重力下で動かせるMSはあるか？」

「・・・ジエガンD型が2機、エコーズのロトが全機出撃可能とのこと！ それとサブフライトシステムが2機！」

「運がいいな。それにエコーズ、特殊部隊か。・・・ならそのジエガン2機には先に偵察

に出ているノーベンバー3とノーベンバー1が搭乗するように伝えてくれ、エコードーズには白兵戦が出来る状態でカタパルトデッキに待機。整備待ちのMSはカタパルトに、無闇に動かなくてもいい。本艦を護衛することに専念させろ。」

「了解!!」

クルーはユウ・カジマに敬礼をし、一斉に動き出す。

艦内で第1戦闘配備の警報がなり、艦内にいた全乗組員が慌ただしく動き出す。

MSパイロットも全員MSに搭乗し、機体の調整を一斉に始める。

ユウ・カジマはテンキーを操作し、再び受話器を手に取り耳に当てる。

「火器管制、第1戦闘配備！全砲門開け、準備でき次第全方位を警戒。命令があるまで撃つなよ！」

〈火器管制了解！〉

「副長はどこにいる？」

「ベネズ中佐、今戻りました。」

女性副艦長であるベネズ・ローカー中佐が艦橋に戻ってきた。

「すまない、機関部の様子はどうだ？」

「異常はありませんでした。しかし本艦は宇宙での運用を前提に建造されているため、重力下での飛行はミノフスキーラフトを搭載するなどの改造でもしない限り厳し

い状況です。スラスターは動きますので、海の上でしたら航行は可能です。しかし…  
本艦の下部は海に浸かっている為、下部カタパルトは使用出来ません」

「浸水箇所は？」

「今のところありません」

「ありがとうございます、今後の方針を決めよう」

「わかりました」

M S格納庫では乗組員と整備員、M Sのパイロットが慌ただしく動いていた。  
その中で、重力下で稼働ができるよう調整された2機のジエガンに2人のパイロット  
が搭乗していた。

その一人、タチバナ少尉はジエガンD型を起動させカタパルトデッキに準備されてい  
るサブフライatingsystem、ベースジャバーの上に機体を乗せる。  
異常がないことを確認し、艦橋に出撃準備完了を伝える。

「ノーベンバー1と3には周辺の偵察を行つてもらいます。偵察任務ですが、攻撃を受  
けた場合は回避を優先し本艦に帰還してください。そちらで記録されているデータは  
こちらで隨時受信します」

「ノーベンバー1、了解した。ゲン、聞いたな?」

「了解です、フォード隊長」

艦橋から出撃の合図が出された。

「お先に。ノーベンバー1、フォード・ファーミング、ジエガンで出撃する！」

先頭にいた隊長機であるジエガンD型がカタパルトから射出された。

次はタチバナ少尉だ。

「ノーベンバー3、ゲン・タチバナ、ジエガン・・・・出撃します!!」

レバーを一気に引き加速する。

ジエガンD型をのせたベースジャバーはカタパルトから射出され、空中を飛翔する。

「それじゃ行くとしますか、付いてこいよゲン！」

「了解ですフォード隊長！」

インフィニット・ストラトスの世界ではじめて2機のMS、RG M-89ジエガンD型が飛翔する。

そして刻々と、インフィニット・ストラトスとモビルスーツがぶつかり合う時が迫つてきていた。

# 空を駆けるM S、海に浮かぶ戦艦

太平洋上空。

快晴の空に二つの影が飛翔していた。

先ほどペガサス・コーウエンから出撃したジエガンD型の2機だ。

サブフライティシステムであるベースジャバーに乗つかり、周辺偵察を行つていて。

脅威が認められていない今はビームライフルをシールドに格納し、両腕はベースジャバーの取つ手部分を掴み、機体は屈んだ状態で飛翔している。

「こちらノーベンバー1、現在周辺を偵察中。今のところ異状はない」

「こちらペガサス・コーウエン、了解。引き続きお願ひします」

「ノーベンバー1、了解」

フォード隊長は周辺で異状がないことを艦に伝えた。

それにしても本当に静かだ。

「静かだなつて考へてるだろ?」

通信モニターにフォード隊長の顔が映る。

「はい、普段なら耳が痛くなるくらい五月蠅いんですけどね」

地球だと常に通信が飛んでくる。

今貴機はここを飛んでいると知らせてくるナビゲーターや味方が通過する等々。中には戦闘中の会話が聞こえてくるときもある。

それが今はいいのだ。

まるで異世界に来たような感じがして落ち着かない。

「確かに、俺も同じ事を考えてた。まるで異世界に来たような感じがして落ち着かない」

「フォード隊長もそう感じますか？」

「ああ。それにGPSから送られてくるこの地図なんか、俺達が知つてるようなやつじやない事も」

メインモニターに表示されている地図を見直す。

コロニーが落とされたオーストラリアにあるはずの巨大な穴がない。

もしかしたら本当に異世界に来てしまったのだろうか？

先ほど艦長と通信で会話をしたとき、異世界にいることが前提で話しているように感じた。

もしそれが正しければ・・・。

「・・・ん？何だ？」

「フォード隊長が何かに気づいた時、コックピット内で警告音が鳴り響き、こちらに何かが接近してくる事を知らせる。

「フォード隊長！レーダーに反応あり、近づいて来ます！」

〈IFF応答がないな、待避するぞゲン！〉

「了解！」

操縦桿を握り機体を左に旋回させる。

するとレーダーに反応していた不明機が急激に速度をあげて接近してくる。

「不明機が加速した!?」

〈ゲン、全速力で行くぞ！念のためビームライフルでも構えとけ！〉

「了解！」

操縦桿についているスイッチを操作し、ビームライフルを装備する。

ジエガンはシールドに格納していたビームライフルを手にし即座に構える。

〈ペガサス・コーウェン！こちらノーベンバー！偵察中レーダーに反応あり、不明機が加速してこちらに接近中!!〉

「フォード隊長が艦に緊急連絡するも不明機に追い付かれてしまった。

「了解！」

〈仕方ない、牽制射撃で近づけさせるな！〉

フォード隊長機のジエガンはビームライフルを不明機が向かつて来ている方向に向けて撃つ。

銃口から強い光が発せられ、ビームは一直線に飛んでいった。

不明機がレーダー上で散開し、速度が少し落ちたことを確認した。

「こちらペガサス・コーウエン、ユウ・カジマだ！ 状況は？」

通信モニターに艦長が映る。

「艦長！」

「こちらノーベンバー1、偵察中不明機に追われ待避中！ 追い付かれつつも牽制射撃で振り切っています！」

「状況は理解した、だがこちらも発見されて前進しているが海の上だ。 いづれ追いつかれる、すぐに合流して護衛についてくれ！」

「ノーベンバー1了解、合流する！」

急いで艦に向かわないと、帰る場所がなくなる。  
それだけは絶対にあつてはならない。

思考をフルに活用してなにか手段がないか探る。

ふとひらめいた。

ジエガンD型にはシールド内蔵式2連ミサイルランチャーが装備されている。

それを煙幕代わりに使えば振り切れるかもしない。

「フォード隊長！・合図したらミサイルランチャーを撃つてください！」

「ミサイル？・・・なるほど、タイミングは任せせる！」

「了解！」

操縦桿のスイッチを操作し、シールド内蔵式2連ミサイルランチャーを選択。

不明機が徐々に接近してくる。

敵はかなり小さいような感じがしたが今はそんな事を気にしている場合ではない。

不明機は射程圏内に入った。

「今です!!」

「了解した!!」

操縦桿の発射ボタンを押す。

2機のジエガンがもつシールドからミサイルが全弾放たれた。

不明機は減速、距離が離れる。

即座に武器を切り替え、頭部バルガンでミサイルを撃ち落とす。

フォード隊長機もそれに合わせて頭部バルガンを発射。

ミサイルは全弾爆発し、爆発煙が空中に広がる。

「いい判断だゲン」

「ありがとうございます！」

〈急いで艦に戻るぞ！〉

「了解！」

爆発煙が晴れる前に二人はこの空域を離れた。

太平洋海上。

ペガサス・コーウェンはスラスターで海上をゆっくりと進んでいた。

整備が完了したMSは15機、カタパルトの上で迎撃態勢を取っていた。

ミサイル又は砲台としてエコーブのロトも半数を出撃させジエガンと共にカタパルトで待機している。

宇宙での運用を前提として造られたこの艦は重力下で飛行することができず、辛うじて浮いている状態で海上を進んでいる。

スラスターの出力を上げればそれなりの速度にはなるが、高出力を連続して使うとエンジンに負担がかかり最悪航行不能になる。

ユウ・カジマは囮まれる事を想定しこうしてMS等を使って艦を守る作戦をたてた。とはいっても、作戦は至つてシンプルでその場で目標を攻撃し艦に近づけさせない。もし敵が艦に乗り込んだら艦内で待機しているエコーブの隊員や白兵戦に特化した

乗員に迎撃させるように配置させた。

あとは敵がどうでるかだ。

「艦長、多数の不明機はあと30分程度で追い付いてきます」

ベネズ中佐がユウ・カジマに逐次不明機の状況を報告する。

「時間の問題だな・・・偵察に出た二人は?」

「何とか不明機を振り切つたらしく全速力で向かっているとのことです」

「何とか振り切れたか」

偵察に出た二人が無事だとしつたユウ・カジマは安心した。

だがそれもつかの間だつた。

「・・・艦長! レーダーが新たな反応を感知!」

クルーの一人がレーダーを見ながら報告する。

「どこからだ!」

「12時の報告です! 数は・・・重なつていてる? 反応が2です! 先ほどの反応よりも三倍の速度で接近している模様!」

三倍の速度と聞いたクルー達は焦り始めた。

30分のはずが予定よりもかなり早く来たのだ。

ユウ・カジマは受話器を取り耳に当てる。

「総員戦闘準備！足の早い奴が接近してきている、火器管制及びカタパルトにいるMSは警戒を厳となせ！」

再び艦内に警報が鳴り響き、全乗組員が再び慌ただしく動き出す。

「前方のカタパルトにいるMSは正面からくる不明機に注意しろ！側面及び後方のMSは引き続き警戒！火器管制も同じ、全方向を警戒だ！」

ユウ・カジマが指示をし、クルーはその通りに動く。

前方のメガ粒子砲が動きだし、動作点検を終える。

「不明機との接触まであと2分！」

レーダーが焦らせるように接近警告を鳴り響かせる。

ベネズ中佐はいつでも動けるよう通信オペレーターの側に立つ。

「不明機、来ます！！」

「火器管制！正面の不明機を照準！まだ撃つなよ！」

前方カタパルトにいるMS達が近づく不明機にビームライフルの銃口を向けた。このまま戦闘になるかと思われた。

通信オペレーターが待つたをかけるように報告する。

「艦長！国際救難チャンネルから通信が！」

「国際救難チャンネルに？」

国際救難チャンネルは所属関係なしに互いと話し合うことができる通信チャンネル。普段は艦が轟沈し助けを求める際に使われる。それが戦闘前に使われるということは・・・何かあると見ていい。だがそれだけではない。

ユウ・カジマ達は正面から来た2機の不明機を見て驚愕する。その不明機は・・・M Sよりもかなり小さく、独特なデザインのパワードスーツか何かを身に纏つた女性達だつた・・・。

# 空に浮かぶ女神、急かされる選択

ユウ・カジマ達はペガサス・コーワエンの正面に現れた不明機を見て動けずにいた。別世界とはいえ、MSが存在することを前提にしていたユウ・カジマの予想は大きく外れたからだ。

その不明機がMSではないなら何なのか？

目の前にいる存在について誰も答えることができない。

MSよりもかなり小さく、独特なデザインのパワードスーツのようなものを身に纏つた二人の女性。

一体どういった構造で空中に浮かんでいるのか。

だが真っ先に注意しなければいけないのは、相手が武器を持っているということ。

2機の不明機は片腕にアサルトライフルが、もう片方は楯を持っている。  
しばらくするとその銃口がこっちに向けられる。

「艦長！ 不明機にロックされました．．．！」

ふとレーダーをみたクルーが不明機にロックオンされたことを報告する。  
艦橋に警告音が鳴り響く。

「前方のMSと火器管制は正面の不明機に照準、攻撃用意！」

ユウ・カジマは咄嗟に指示を出す。

動きを止めていたMSは再び動きだし、ビームライフルの銃口を、ミサイルラン

チャーの発射口を目標に向けてロックオン。

前方にあるすべてのメガ粒子砲も目標を捉えた。

「・・・艦長、国際救難チャンネルに再び不明機からの通信！」

通信オペレーターはユウ・カジマに顔を向ける。

彼の選択を伺っているのだろう。

答えるべきかそうかを。

「ベネズ中佐、この状況を見て今の俺達がどういう状況にあると思う？」

隣にいた女性副艦長のベネズ中佐はユウ・カジマの問いに答える。

「最初はなんとも考えておりませんでした。宇宙戦艦であるドゴス・ギア級3番艦ペガサス・コーウエンが重力下で飛行できず海上で辛うじて浮いている。敵からみれば格好の餌食でしょう、相手が戦艦かMSであればの話ですが。・・・しかし、今我々の目の前に存在しているアレをこの目で見て思いました。我々は・・・異世界に来てしまったのではないかと」

どうやらベネズ中佐もアレをみて自分達が異世界に来てしまったという考えを持ち

始めたようだ。

「俺もそう思つてゐる、考え始めたのは多分俺が先だろう。アレをこの目で見る前の……俺達が海の上で浮かんでいた時から俺はそう考えていた」

「そうでしたか……。しかしながらそのような質問を?」

「俺達が異世界に来てしまつたのが事実だとしたら、我々には味方がいない。頼れるのはこのペガサス・コーワエンの全乗組員とMSのパイロット達だけだ」

「つまり……」

「ああ、俺達は今、命綱がない状態で別世界に存在していることになる」

「……」

ユウ・カジマの一言で、艦橋にいる全クルーは絶望した。

味方はどこにもいない、それだけでなくいずれ必要となる艦やMSの補給すらない。下手をすればこのまま鉄屑になり朽ち果てることになるからだ。

「皆、俺は一先ず相手の呼び掛けに応じようと思う。というより、味方がいない状況でそれ以外の答えはないと思うだろう。俺は異世界でこのまま朽ち果てるつもりはない、皆の意見を聞かせてほしい」

ユウ・カジマは艦橋の全クルーを見渡す。  
突然すぎる選択。

この選択が今後に大きく響く。

皆はそれを理解していたため、すぐに答える者は出てこなかつた。  
数分後、クルーの皆は決断しついに答えを出した。

「艦長、我々はこのペガサス・コーワエンに乗つた時から我々の命を貴方に預けています。その命をどう使うかは貴方の自由です。我々は軍の誓約通りに宣誓しここにいる、覚悟はでています。我々は・・・艦長のご決断を支持します！」

一人のクルーがそう宣言すると、全クルーは不動の姿勢を取り、ユウ・カジマに対し敬礼を行つた。

ユウ・カジマは艦長席から立ち上がる。

「・・・ありがとう、皆。誰一人死なせることなく全力で生きよう」

それを聞いた全クルーは笑顔を見せた。

隣にいるベネズ中佐も密かに微笑んでいる。

「よし、総員配置につけ！・・・国際救難チャンネルを開いてくれ、相手に応じるぞ」

「了解！」

テンキーを操作し、受話器を手に取り耳に当てる。

「・・・通信繋がりました！」

通信オペレーターは繋がつたことを報告した。

ユウ・カジマは相手に応じる。

「……こちらは地球連邦軍所属、ペガサス・コーヴエン。そちらの所属と目的を明らかにされたい」

しばらくすると、返事が帰ってきた。

〈我々は日本国自衛隊より出撃要請を受けた国際 I-S 委員会日本支部だ。我々は日本の領海に接近している貴艦に対し進路の変更及び誘導、もしくは撃沈を目的とする。しかし貴艦の所属についてだが、我々は地球連邦軍という組織は存じていない。ふざけているのなら、事と次第によつては撃沈する。それに……貴艦の上に存在している巨大な人型兵器はなんだ?〉

正直ユウ・カジマはついていけなかつた。

日本なら知つている。

だが自衛隊という組織は知らない。

国際 I-S 委員会日本支部、そもそも I-S とはなんだ?

彼女のいつているすべてが理解できなかつた。

「艦長、目標は我々の M-S を鹹獲するかもしれません。M-S には核融合炉が搭載されています。それが相手に鹹獲されれば……」

「相手は M-S のことを知らないようだつた。だとすれば我々の持つている技術はこの世

界にないということになるな。厄介だ・・・」

「我々の持つていてる技術が流れてしまえば深刻な事態になります」

「そうだな」

ユウ・カジマは再び受話器を耳に当てて先ほどの質問に答える。

「ふざけているつもりはない、それに我々はそちらのいう国際 I-S 委員会や日本国自衛隊という組織を知らない。なお、我々の兵器を鹵獲するような行動が見受けられた場合、本艦はそちらからの先制攻撃と見なし迎撃する」

ベネズ中佐に顔を向けると、彼女は攻撃態勢が完全に整ったことを知らせる。

レーダーを監視していたクルーからは、本艦が後方から来た不明機に囲まれたという報告を受けた。

通信でやり取りしている間に、ベネズ中佐が火器管制及び側面・後方に待機している M-S 隊に攻撃用意を命じていた。

これで本艦は万全な態勢がとれた。

「ふん！男の癖に、我々に勝てると思つてているのか？ではこちらも、貴艦は我々に対し挑発行為を行つたと見なし対処する！」

それきり通信が一方的に切られてしまつた。

結果・・・話がまったく噛み合わずに終わり、戦闘になる。

「来るぞ！ 総員、目標を敵とする！ 以後【女神】と呼称！ 全M S隊、相手からの攻撃を受け次第攻撃開始!! 火器管制は全方位を警戒及び迎撃！ 艦に近づけさせるな！」

ユウ・カジマが命令した直後、女神が攻撃を開始し艦に命中。

着弾した衝撃が艦全体に響くが、ペガサス・コーウエンは無傷。

頑丈な装甲はそう簡単に破れはしない。

「総員攻撃開始!!」

「攻撃開始！」

ユウ・カジマは攻撃を命じ、ベネズ中佐の復唱で艦内に警報が鳴り響き戦闘がはじまつた。

選択したのは・・・抵抗という名の戦闘だつた。

# 巨人を前にした女神が怯える

太平洋で始まつた戦闘。

空を飛び回る女神達はペガサス・コーワエンを囮み集中攻撃。それに抵抗し艦の上に待機していたすべてのMSが反撃、ペガサス・コーワエンも全ての武装を女神に照準を合わせ一斉射撃。

太平洋上空はビームと実弾、ミサイルなどが交錯する。

メガ粒子砲から放たれた高出力のビームが女神達の近くを横切る。

命中したのか、女神は手にしていたアサルトライフルを手放すと空中で爆散した。

「こちらデルタ1！艦の後方に敵が集中してきてる！おそらくメインスラスターを破壊する気だ！小さいし動きが早すぎて追いつかない！実弾系の武器を要請する！」

後方で迎撃をしているMSのパイロットから実弾系の武器を要請された。ジエガンが持っているビールライフルは单発式で連射はできない。

またビームは実弾と違つて素直に真っ直ぐ放たれる。

だが動きが早い相手だと攻撃などによる硬直を狙わない限り命中は難しい。女神達は止まることなく常に飛び回つていて隙がない。

「後方の対空砲全てをメインスラスターに近づいてくる女神達に照準！ベネズ中佐」

「インターフォンで会話をしていたベネズ中佐は受話器を定位置に戻し報告する。「たつた今確認が取れました。試験航行ルートにいた味方艦に渡す予定だつたものがあるそうです。旧式ですがブルパップマシンガンが直ぐに出せるそうです」

ブルパップマシンガン、一年戦争でユウ・カジマがかつて乗っていたMS、RGM-79G ジム・コマンドに装備されていたマシンガンだ。

90mmの弾を連射する取り回しのいい武装だが、一年戦争時に使われた事もありかなり古い。

だが今はそんなことをいつている場合ではない、使えるものは全て使つてでも生き延びなければならない状態なのだから。

「弾はどれくらいある？」

「防衛戦が2回程行える程の量だと聞きました」

「よくそんな量がこの艦に入れたな・・・、直ぐに弾を装填して出してくれ」

「了解、・・・MSに通達！旧式の実弾兵器を出す、後方にいるMSに優先して回せ！メインスラスターを防御！足りなかつたところは引き続きビームライフルによる迎撃！」  
ベネズ中佐が通信オペレーターを通じてMSに指示を出す。

それぞれのカタパルトデッキからブルパップマシンガンとその弾を抱えたジエガン

が出てきた。

抱えていた武器を迎撃を行つてゐるジエガンに武器を渡していく。

それを受け取つたジエガンはビームライフルをシールドに格納し、ブルパップマシンガンを手にして即座に連射。

90mmの弾が一斉にばらまかれる。

「艦の状態はどうだ？」

「それが・・・不思議なことにほぼ無傷です。恐らく、敵が装備している武器の口径が小さすぎるからではないでしょうか？」

「・・・言われてみれば確かに、相手は人間より少し大きいくらいだ。それに対しても俺たちは・・・」

「史上最大と言われている戦艦に、約20mのMSですね」

相手からみたらMSはただの巨人でしかないだろう。

正直出せるもの全てを出してまで迎撃することはないだろうと思うかも知れないが、油断はできない。

「それでも油断は禁物だ。あの小ささなら艦内に侵入されてもおかしくはない。それにMSを艦内で動かせるとしたらMSデツキくらいだ。となれば生身での白兵戦になるが、アレが相手じや勝ち目はないな」

「はい、戦闘中に敵を観測しておりますが、敵はIフィールドらしきものを持つていています。ですが信じがたいことにビームだけでなく実弾を防いでいて……」

「俺達の知らない技術つてところだな……とにかくこの艦には近づけさせんな！」

そう命令した直後、レーダーを見ていたクルーが新たな状況の変化を報告する。「艦長！ 2時方向よりこちらに向かってくる機影があります！ 数は2、これは……IFに応答あり、ノーベンバー1と3です！」

「帰ってきたか！」

偵察に出ていた2機のジェガンがやつとのことで帰ってきた。

偵察から急いで艦に急行したジェガン2機。

攻撃を受けているペガサス・コーワエンを見たゲン・タチバナは焦り始める。「フォード隊長！ 艦が……！」

〈分かつていてる、こちらノーベンバー1！ たつた今合流した！〉

通信モニターに艦長であるユウ・カジマの顔が映る。

その顔はどこか安心したような感じだった。

（ユウ・カジマだ、よく戻つてくれた！ 状況は見ての通りだ。だが攻撃を受けているものの艦は無傷だ）

「無傷？集中攻撃を受けているのにですか？」

「ああ、どうやら敵は持っている武装の口径が小さいようだ。おそらくだが、MS戦闘を想定したものじやないことが考えられる」

〈それじや俺達の出番はなさそうですね〉

「フォード隊長が残念といった感じでやれやれと言う。

「ですが油断はできませんよフォード隊長、もし艦に入られでもしたら……」

〈タチバナ少尉の言うとおりだ、艦でMSを動かせるとしたらMSデッキだけに制限される。相手はあるの小ささだ、容易く艦内に侵入される可能性が大きい。それに生身で戦えるような相手じやない。……ともかく、直ぐに迎撃に当たつてくれ！〉

〈そくなつたらヤバイですな、了解！ノーベンバー1、迎撃する！〉

「フォード隊長機のジエガンが敵に向かつて突撃を開始した。

「ノーベンバー3、迎撃します！」

サイドモニターを操作し、通信モードから武装表示に切り替える。

ビームライフルを再度装備したのを確認し、足のペダルを踏み込む。

スラスターの出力が上がり、敵との距離が一気に縮む。

前方の敵がこつちに気づき、艦に向けていたアサルトライフルをこつちに向ける。

「遅い！」

操縦桿の発射トリガーを押す。

ジエガンが手にしているビームライフルの銃口からビームが放たれ、敵に命中した。  
だが・・・

「なッ・・・ビームが弾かれた!?」

敵は防御する素振りを見せせずビームを受け止めた。  
まるで見えない壁に守られているかのような感じ。

ゲン・タチバナはひとつ可能性を考えた。

「Iフィールドか!・・・ならッ!!」

操縦桿のスイッチを操作し、武装を切り替える。

シールド内蔵の2連式ミサイルランチャーランチャーを発射。

再び武装を切り替え、頭部バルカンポッドが作動する。

ミサイルが敵に命中したのを確認し、発射トリガーを引く。

ジエガンの頭部に装着されているバルカンポッドが火を噴いた。

発射された弾は全て敵に命中する。

「どうだ・・・?」

しかし敵はまだ健在していた。

直撃はしていなかつたようだが、何かとボロボロになつてゐるのが確認できた。

すると敵は手にしていたアサルトライフルを投げ捨てた。

暫くするとアサルトライフルは空中で爆散した。

どうやらアサルトライフルに弾が命中したようだ。

「MSより小さいのに何て防御力だ……！」

敵が急に上昇すると、どこから出したのか不明だが手にブレードが握られる。

なんと相手は20・4mもあるこのジエガンに格闘戦で挑もうとしているのだ。一瞬何かを感じ取つたゲン・タチバナは直ぐに反応してジエガンが左腕に装備しているシールドで防御態勢をとる。

「あいつ……頭かコックピットを狙う気か……！」

人は巨大な敵と遭遇すればどこを攻撃すればよいか、弱点はどこかを即座に考える。

巨大な敵が人型だとしよう。

巨大な敵が生物なら心臓などの急所を狙えば一撃だ。

なら機械なら？

頭と考えるのが普通かもしれない。

ロボットは大抵重要なものが頭部につまっていることが多い。

その頭部を破壊されるなどして失われれば機能することはできない。つまり敵は……この考えで来るのかも知れない。

だがそれとは別に、ゲン・タチバナは何かを感じていた。

これが殺氣なのかは分からない、だが敵はコツクピットを狙っているような気がしているのだ。

敵は真っ直ぐこつちに突っ込んでくる。

手にしているブレードを大きく振り上げ・・・そして振り下ろす。

ブレードは盾にしていたシールドに当たり弾かれる。

その衝撃がコツクピットまでに伝わってきた。

「何なんだこれ!? 小さいのに一撃が重い!!」

下手すればいずれやられそうな感じがした。

だがそんな小さなブレードでチタン合金セラミック複合材を切り裂くことはできるのか?

いや、できないはずだ。

何せそのブレード自体が小さすぎるからだ。

しかし切れはしないがその一撃が重く、衝撃が強い。

いわば打撃武器だ。

何回も打撃を食らえば衝撃でMSの機能が故障する可能性がある。ならやられる前に墜とすしかない。

「……悪く思うなよ！」  
小さい相手に対して容赦ないとは思うが、これも今後生きていく為だ。

操縦桿のスイッチを操作し、武器をビームサーベルに切り替える。  
それを見た相手の表情がカメラ越しでよく見えた。  
あれは完全に怯えている顔だ。

何せ巨大な敵が巨大な剣を出してきたのだ。

しかもジエガンが手にしているものは実体剣ではなくビームの剣。

M Sなら切られたように見えるが実際は熔かして切断、人間なら確実に焼き消され  
る。

それも骨すら残さずに。

「戦場では……死ぬか生き残るかの2択なんだよ!!」

足のペダルを踏み込みスラスターの出力を全開にする。

ジエガンは速度を増して敵に急接近。

操縦桿を操作するゲン・タチバナ。

ジエガンは振り上げたビームサーベルを……敵に振り下ろした。

敵の断末魔の叫びが一瞬だけ聞こえた気がした。

# 存在を消された女神、激変する世界

ビームサーベルを振り下ろしたジエガンD型。

女神は爆発することなくビームに焼き消されこの世から存在を消した。

これで終わりに見えるだろう。

だが・・・ゲン・タチバナは違つた。

「・・・・・ッ!?」

彼はビームサーベルで焼き消した女神・・・いや、怯えた表情をした女性の顔を脳裏に焼き付けてしまう。

それだけではない、この世から消滅し本来聞こえるはずのない悲鳴が後から頭の中で響いたのだ。

彼女はこう叫んでいた。

(嫌・・・死にたくないッ・・・お願ひ助けて!!嫌ああああああああああああああ!?)

元の世界ではMS同士でジオンの残党と戦い、幾度となく敵を殺してきた。  
だが相手はMSではなく、パワードスーツを身に付けた生身の人間。

MSだつたら乗つているパイロットの死に様を見ることはなかつたが、彼は今それを

初めて間近で目にした。

そして知った、ビーム兵器で討たれた人間の死に様を。

ゲン・タチバナは頭痛で額に手を当てる。

しかし戦場は待つてくれない、コックピット内で接近警報が鳴り響く。レーダーを確認すると敵が後方から2機、こちらに向かつて来ている。

偶然敵の通信を傍受したのか、敵の声が聞こえる。

〈貴様ああああ…よくも…よくもアタシの友人をツ!!〉

操縦桿を再び握り、機体を反転させる。

さつきと同じように近づいてくる2機の敵がブレードの剣先をこちらに向けて突撃してくる。

彼女達の殺気がよく伝わってくる。

「言つたはずだ！戦場では死ぬか生きるかの2択だと!!」

武装を切り替えバルカンポッドを女神に照準を合わせ連射する。

しかし女神はそれを避けることなくそのまま真っ直ぐ突っ込んでくる。

操縦桿を操作し、シールドを構える。

ペダルをベタ踏みし、スラスターを開。

ジェガンはベースジャバーから飛び立ち突っ込んでくる女神を正面から迎え撃つ。

強烈なGが体を襲う。

距離が徐々に近づき、振り下ろされたブレードがシールドを叩きつけた。操縦桿を強引に操作し、ジエガンは左腕に装着されているシールドで女神を海に叩き落とす。

ハ工叩きで叩かれたような感じで2機共水柱を立てて海に落ちた。

戻ってきたベースジャバーに乗つて機体を上昇させ、敵との距離を離す。操縦桿のスイッチを操作しビームライフルに切り替える。

ジエガンはビームライフルを右腕に装備する。

照準を女神が落ちた海面に向けて引き金を引く。

ジエガンはビームライフルの引き金を引き銃口からビームが放たれた。

ビームによつて海水が蒸発する。

メインカメラで海面を確認すると、先ほどの二人が意識を失つて浮かんでいた。

「またIフィールドか・・・」

彼女達が生きているのなら、恐らくトラウマになつてゐるだろう。

人間よりもはるかに大きいM.S.、高出力のビーム兵器を直接受けた恐怖。考えたくもなかつた。

彼女達はパワードスーツを装着しておらず、水着のような物を着ていた。

通信モニターが表示され、フォード隊長の顔が映される。

「ゲン、無事か？」

「フォード隊長」

「その様子だと無事のようだな、よくやつた」

「何機落としました？」

「それがな、逃げられちまつた。お前が1機目を落としたとき、俺と戦つてた2機が血相  
変えてお前の所に突つ込んでつたぜ」

海上に叩き落とした二人がそのようだ。

通信モニターがもうひとつ表示される。

呼び出し先はペガサス・コーワエンだ。

「敵機は撤退した模様、MS隊は数機をカタパルトに残し帰艦してください。尚、艦長よ  
り生き残った女神は救出し帰還せよとのこと。繰り返します・・・」

メインカメラをペガサス・コーワエンに向ける。

敵は既に撤退していて、カタパルトデッキではMSが散らかつた武器や薬莢を片付け  
ていた。

「んじや、拾つて戻ろうか

「了解、救出します」

高度を海面ギリギリまで落とし、武器を持つていらない左手で二人を救出する。

ジエガンの左腕を前方に出し、手をコツクピットの前に近づけた。

コツクピットハッチを開き、ジエガンの手のひらに乗り救出した二人のバイタルを確認する。

「フォード隊長、二人とも気を失っているだけでバイタルは正常です」

〈了解、念のため暴れないよう拘束だ〉

コツクピットからフォード隊長の面倒くさそうな声が聞こえた。

手を後ろにしてワイヤーで縛る。

二人をコツクピットの下部に寝かせ、シートに座る。

ハッチを閉鎖し救出は完了した。

「救出完了です」

〈帰ろうか！ペガサス・コーワエン、こちらノーベンバー1、ノーベンバー3は生き残った女神を救出。これより帰艦する〉

〈ノーベンバー1了解、ノーベンバー3、お疲れ様でした。気をつけて帰艦してください〉

「了解」

操縦桿を握り機体を艦に向けた。

とはいっても、遠く離れている訳でもなかつたので直ぐに到着し、カタパルトでベースジャバーを降りた。

カタパルトデツキにいるMSが道を譲ってくれた。  
そのMSは濃い茶色に紫色のバイザー、肩にヒートナイフを装備したエコーブ仕様のジエガンだ。

〈お疲れ様、ゲン〉

パイロットはゲン・タチバナがいつも世話になつてゐるローベル大尉だ。

「ローベル大尉、ご無事で！」

〈女神が手にしていた武器の口径がかなり小さいかつたからかすり傷すらないよ、心配してくれてありがとう。ゲンも偵察お疲れ様〉

「お疲れ様でした、ローベル大尉」

MS同士でお互いに敬礼し、ゲン・タチバナが操るジエガンD型はMSデツキに進む。  
機体の格納が完了し、コックピットハッチを開放。

そこにはエコードの隊員が数名、武器をもつて待機していた。

「ようゲン！異世界でも変わらずの撃墜王だな」

「相手が相手でしたから、捕虜は下で横になつてます」

ゲン・タチバナはコックピットシートの真下で寝てゐる救出した二人を指差す。

まだ目覚めていないようだ。

「はいよ、お疲れさん！・よし運ぶぞ」  
「了解」

救出した二人をエコーズに任せてコツクピットを出る。

向かう先はフォード隊長機。

丁度格納が終わつたようでコツクピットから出たところだつた。

「フォード隊長」

「おうゲン！お疲れさん！」

お互い手を上げて軽くハイタッチ。

そのまま艦長室へ向かう。

急な出撃だつたため、二人は制服を着たまま戦闘に参加していく。

その為着替える必要がなかつた。

ユウ・カジマに呼ばれたのは偵察の報告をする為。

記録は常時ペガサス・コーウエンに送信していたのでジエガンD型から記録をコピー

する手間は省けた。

艦長室にたどり着き、互いの服装を確認してインター ホンのボタンを押す。  
扉が開き、二人は艦長室へ入室した。

太平洋での戦闘が終わって三時間後。

事態は全世界で若干規制がかけられたが報道された。

謎の勢力が太平洋上に出現、戦闘が発生した。

そしてこの報道が世界を大きく激変させた。

戦闘で1機のISが完全に消滅。

2機のISと二人の操縦者が謎の勢力に囚われた。

そして、巨大な人型兵器が高出力のビーム兵器を持つて戦っている映像が全世界に流れてしまつた・・・。

# 事態が全世界に知り渡る

太平洋での戦闘が報道される同時刻。

織斑家。

「千冬姉、今日の昼飯どうする?」

「そうだな・・・一夏、久しぶりに外食でもどうだ?」

「千冬姉、外食はあんまり・・・」

「たまにはいいだろう、毎日上手い飯を作つて貰つているんだ。少しくらい休め」  
リビングでは姉の織斑千冬と弟である織斑一夏が今日の昼飯について話し合つていた。

今日は休日で、実家に帰つてきた二人は久しぶりに姉弟でのんびりと生活している。

織斑一夏が高校入試で誤つてISを起動して以来、男性初のIS操縦者として強制的にIS学園に入学させられ今はISについて猛勉強している。

姉の織斑千冬はその学園の教師として生徒に教育をしている。

偶然かどうかは不明だが、織斑一夏の在籍するクラスは1組で、その担任が姉である織斑千冬なのだ。

普段は姉を織斑先生と呼んでいるが、今はプライベートであり千冬姉と呼んでいる。

「まあ・・・千冬姉がそういうなら。どこにいくんだ?」

「それなら既に決めている。ラーメン店にいくぞ」

「ラーメンか!久しぶりに食べるなあ」

「美味しい店を知っているんだ、さつさと準備して行こうか」

「おう」

二人は普段着から外出用の服に着替え、家を後にする。

暫く歩いて駅に到着。

電車賃を電子カードで支払い電車に乗り込む。

2つ目の駅で降り、改札を出て街を歩く。

この街は一夏がよく知っている街だった。

I.S学園から近いということもあって、買い物をするために立ち寄っている街だ。  
だが織斑一夏は違和感を感じた。

この街にいる大勢の女性達。

いつものような楽しげな会話ではなく、何やらソワソワしていて落ち着かないような

感じだ。

回りを見渡すと女性達が街のあちこちに数人くらいで集まってなにやら噂話ををして

いる。

「なあ千冬姉、何かおかしくないか?」

隣を歩いている織斑千冬に問いかける。

「何がだ?」

「何か・・・いつもならこう、楽しげな会話をしているはずなのに今は落ち着かないような感じがするんだ」

「・・・言われて見ればそうだな。だが今はプライベートだ、仕事の話はなしだぞ一夏」「いつも大変だもんな、千冬姉は」

「主に愚弟のせいでな」

「ちょ、千冬姉!」

「フ、冗談だ」

織斑千冬は笑みを浮かべ、織斑一夏は全く・・・といった表情をした。

暫く歩いた二人は目的地であるラーメン店に到着した。

織斑千冬が引き戸を開けて入店、織斑一夏も続いて入店した。

「いらっしゃい!」

カウンターの奥で雑誌を読んでいた店主が出迎えてくれた。

カウンター席に座り、机に水とおしぼりが置かれる。

「こりや織斑のお嬢じやねえか。ん？お前さんはお嬢の弟か！テレビで見たことはあるが、直接見るのは初めてだな！俺はこの店の店主をやってる木村だ、宜しくな」

「どうも、弟の織斑一夏です」

織斑一夏は店主と挨拶をかわした。

「久しぶりに姉弟で外食つてどこか？」

「ええ、それより今日は客が少ないですな」

回りを見渡すと、いつも客で席が埋まっているはずなのに今日は誰一人客が入店していない。

「そうなんだよ・・・何かは知らねえが女にとつて何やらまずい事態になつてるって話を聞いたんだがさつぱりでよう

「まずい事態・・・ですか」

「街にいる女達が言うにはな。お嬢はいつものやつか？」

「ええ、お願ひします」

「へいよ、坊主は？」

「えつと・・・味噌ラーメンと餃子で」

「ほう、こいつは面白えな！家族そろつて同じ注文と来たな！んじや今作るからよ！」

そう言つて店主は伝票に注文の品を書き込んでいく。

書き終えた店主はカウンターの奥にある調理場に立ちさつそく調理する。

「千冬姉も？」

「ああ、味噌ラーメンと餃子。仕事が遅くなつたときについつも食べに来ているんだ」「通りで体重が増えてる訳だ……」

「何か言つたか一夏？」

「いえ何でもないです」

女性に對して言つてはいけない爆弾発言を織斑一夏は慌ててごまかした。  
それよりも織斑一夏は先ほどの事が気になつて仕方がなかつた。

街のあちこちに集まつた女性達がなにやら噂話をしていた。

そして今店主が言つていた女性にとつてまずい事態。

一体何があつたのだろうか。

ふと、彼は壁にテレビがかけてあるのを見つけた。

織斑一夏は店主に一言。

「すみません、テレビつけてもいいですか？」

「おう、好きに見な！」

リモコンにある電源ボタンをテレビに向けて押し、電源を入れる。

テレビはニュース番組を映した。

「なんだ一夏、さつきのが気になるのか？」

「ああ、どうも気になつて仕方ないんだ」

「噂話程度なら報道などされないとと思うがな・・・」

織斑千冬がそう言つて水を飲みかけた時だつた。

その時見た報道が織斑千冬を驚愕させる。

（今入つた情報です、日本の領海に接近してきている不明勢力とスクランブル出撃した自衛隊及び日本のIS部隊が太平洋上で衝突し戦闘になつたとの情報が入りました！官邸で行われた緊急記者会見で、日本側の被害は甚大との発表があり、たつた今官邸で対策本部が設立されました。日本側の被害はIS1機が消滅し、2機は不明勢力に撃墜されISごと囚われたとのことです。また、IS部隊がスクランブル出撃した後に航空自衛隊の戦闘機が出撃しましたが、これも撃墜され全滅したことです。また、戦闘があつた海域の付近で漁業をしていた漁師が戦闘を撮影し、その映像が公開されました。映像をご覧ください）

映像が切り替わり、某動画サイトの画面が表示され、撮影された動画が再生される。それを見た織斑千冬は目を見開いた。

映像はISよりも大きい巨人と1機のISが格闘戦を行つてゐるところだつた。ISのブレードが巨人のシールドに当たりISは弾き飛ばされる。

巨人が手にしていた銃をシールドに格納すると、右腰から筒を取り出し、その筒からビームの剣が出現した。

それを構えた巨人はISとの距離を一気に詰めてビームの剣を振る。  
ISはビームによつて消滅した。

爆発もせず、存在そのもの全てを消し去られた。  
それを一緒に見ていた織斑一夏は凍りついた。

ISにはシールドエネルギーと、操縦者の命を守る絶対防御というものがある。  
その両方の機能が容易く破られISもろとも操縦者を消し去つてしまつたのだ。

ISの操縦者である織斑千冬と織斑一夏にとつて、とんでもなく信じがたい事が太平洋で起きてしまつた。

「嘘だろ・・・IS?」と・・・!?

「そんな馬鹿な・・・ツ!」

「なんてこつたい・・・そういう事だつたんか。二人とも、お代は要らねえ、これを持つていきな」

店主は一人に即席で作つたラーメンの具材と米で作つた握り飯を渡す。

「そもそもいきません、緊急事態とはいえ・・・」

「いいんだよ織斑のお嬢、行くんだろう?なら差し入れくらい受けとれや。坊主、持つてい

きな！」

店主は握り飯の入った袋を織斑一夏に手渡す。  
彼はそれをしつかりと受け取った。

「ありがとうございますッ！」

「良いってことよ！ほれ、行つてきな！元気な顔でラーメン食いに来てくれよ！」

「はい！」

「ありがとうございます。このお礼はまた来たときに、では行つてきます」

「おう！氣をつけてな!!」

店主に見送られ、織斑千冬と織斑一夏は急いで I.S 学園に戻った。  
専用機持ちの生徒も、この報道を聞いて直ぐに学園に向かつたのだつた・・・。

# そびえ立つMS、足元での会話

海面に浮かぶドゴス・ギア級3番艦、ペガサス・コーウエン。

女神との戦闘の後、ペガサス・コーウエンは航行を止めて海面で停泊していた。

無闇に動けば領海侵犯だと認識され、また戦闘になることから上級階級の会議で動くのを止め暫く様子を見るという意見で全員が一致し今に至る。

また、艦が停泊している周辺に1時間交代でMSによる巡回を行うことが決定。

そして急ピッチで重力下での運用ができるよう整備されていたMSだが、2時間前にすべての調整を終えて戦闘配備となつた。

艦内にあるMSは巡回に出ている機体以外すべてがMSデッキに格納されている。

ゲン・タチバナはMSデッキに格納されている愛機、スタークジエガンを見上げる。

そびえ立つスタークジエガンは常に主を待っているような感じがした。

本来スタークジエガンは小隊長クラスに支給される機体だが、新人パイロットであるゲン・タチバナに支給された事にはある理由がある。

ジエガンD型のリミッターを解除しても彼の反応に機体が追い付いていないのだ。

ユウ・カジマはゲン・タチバナにアナハイム・エレクトロニクス社のテストパイロツ

ト勤務を命じたことがあつた。

本人は理由を聞かされることなく勤務したが、ユウ・カジマは確信した。  
ゲン・タチバナはニュータイプに覚醒しつつあるということに。

ユウ・カジマは軍本部にMSを申請し、ゲン・タチバナに支給されたMSがこのスタークジエガンなのだ。

しかしそれでもゲン・タチバナの反応に機体はほんのわずか追い付けていなかつた。

それ以降スタークジエガンはリミッターをすべて解除され、普通の人間では扱えなくなるほどになってしまいゲン・タチバナの専用機となつた。

「タチバナ少尉、何かありましたか？」

整備員に声をかけられたゲン・タチバナは考えるの止めた。

「いえ、何でもないですよ」

「またまた、MSが少尉の反応についてこれでないって思つてゐるでしよう？」

整備員に考えていることを読まれてしまつた。

「・・・まあそうですね」

「これでもリミッターはすべて解除されてるんですよ。前に他のパイロットが稼働試験で乗つてましたけど、出力が高すぎるし、操作系もすべてが敏感すぎて扱えないって

「言つてましたから」

「人間じやないのかな俺・・・」

それを聞いた整備員は笑みを浮かべ、それを否定する。

「少尉は人間ですよ、ただ他の人と違つて無茶しそうなだけです」

「無茶・・・ですか？」

「少尉の操縦は毎回と言つていいほど無茶な動きをするじゃないですか、パイロットの間じや命知らずつて言われてるんですよ？」

「そうですか？」

「そうですよ、戦闘で敵の放つたビームをビームサーベルで弾くのは少尉だけです」

「ファンネルの対処もな」

会話に混じつてきたのはフォード隊長だつた。

「フォード隊長」

ゲン・タチバナと整備員は会話を止めてフォード隊長に敬礼をする。

フォード隊長は答礼し、3人は手を下ろす。

「お前、袖付きと戦闘での4枚羽と戦つたのを覚えてるか??なんのオプションもないジエガンでビームサーベルをもつてファンネルのビームを弾きながら突っ込んだのはゲンだけだぞ?しかも初陣だつたんだぜ?」

フォード隊長が語っているのは、ゲン・タチバナがMSパイロットとして初めて戦場に出たときの事だ。

ペガサス・コーウェンに転属する前はサラミス級の戦艦に配属されていた。

巡回航行で袖付きと遭遇し戦闘になった。

当時、ゲン・タチバナのコールサインはロジャーベイ、隊長機のロジャー1はフォード隊長だった。

出撃して戦闘に参加したとき、味方機が次々と墜ちていくのに気づいたゲン・タチバナは4枚羽を発見。

無理だと判断したフォード隊長はそいつから離れろと言うがゲン・タチバナが操るジエガンはビームサーベルを構えて4枚羽に突撃。

ファンネルのビームをビームサーベルで弾きながら距離を一気に詰めて4枚羽の象徴である大きな羽を1つ切り落としたのだ。

それ以降袖付きは撤退し戦闘は終わった。

艦は中破、MSはフォード隊長とゲン・タチバナの操るジエガン2機だけが帰艦した。

その後連邦本部から2人にペガサス・コーウェンへの転属を命じられ、ここにいる。

「タチバナ少尉・・・初陣でそんな無茶を!」

「フォード隊長!」

「いいじやねえか、お前さんはまだ新人だが俺にとつちや立派なエースなんだ。だから安心して背中を任せられる、頼んだぜ？」

「そう言われたら断れるわけないじやないです、背中は任せてください」「けど4枚羽にビームサーベルで一発かますくらいだからなあ、いつそのこと俺と変わるか？」

「無茶言わないでくださいよ・・・」

暫く整備員も交えた3人で楽しく会話ををして過ごした。

暫くするとフォード隊長は何かを思い出した。

「あ、いつけね。俺達艦長に呼ばれてるんだった」

「俺達？」

「ああ、艦長に呼ばれててな。お前をつれてくるようにと言っていたんだ」

「何で大事なことを忘れるんですかフォード隊長」

「わりいわりい、思い出話で夢中になつてたらついな。んじや行こうか」「了解です。・・・それじや、愛機をお願いします」

「はい、任せられました」

整備員と別れ、フォード隊長とゲン・タチバナは艦長室へと向かつた。

# パイロットの怒り、女神の涙

艦長室に入室したフォード隊長とゲン・タチバナ。

敬礼をし、今来たことを報告する。

「艦長、フォード・ファーミング大尉、ゲン・タチバナ少尉を連れて参りました」

「ああ、それでは行こうか」

ユウ・カジマは椅子から立ち上がる。

いきなりの事でなんの話かわからないゲン・タチバナは質問をする。

「行くつて、どちらにですか？」

「女神が目を覚ましたと医務室から連絡があつたんだ。エコーズに任せようとしたが、きっとと怯えてしまうだろう。だから直接俺が行こうと決めたんだ」

「ああ・・・そうですね」

「エコーズがいくら特殊部隊とはいえ脳筋しかいなさそうですからね」

「フォード隊長・・・それ、ローベル大尉とエコーズ隊長のバルト中佐に聞かれたら事ですよ」

「もういるがな」

氣づけば三人の後ろにバルト中佐とローベル大尉がいた。

「バルト中佐にローベル大尉、何か用か?」

二人はユウ・カジマに敬礼をする。

「いえ、俺達の噂話をしているようなので様子を見に来ました」

バルト中佐はフォード隊長に顔を向ける。

「そしたらフォードがエコーブは脳筋の集まりだと発言したとか」

「実際そんなもんだったバルト」

「はあ・・・俺とローベル大尉ならいいが、他の隊員に聞かれたらまたMS戦を挑まれる

ぞ」

「ボコボコにしてやるさ、それに退屈してたんだ」

「その腕でなぜエコーブに来なかつたんだか」

バルト中佐とフォード隊長は幼なじみらしい。

連邦軍の士官学校では二人とも成績優秀者で、パイロットとしての腕も飛び抜けていた。

だが、エリートを目指すバルト中佐とパイロットとして活躍したいフォード隊長は互いに別の道を進むことになり、今に至る。

バルト中佐はペガサス・コーヴエンに駐留するエコーブの隊長に上り詰め、フォード

隊長は総撃墜数が73機の撃墜王だ。

「難しい事は苦手なんだ、察しろ」

「ああ、脳筋ということか」

「言つてくれるなあバート」

本当に仲のいい二人だ。

中佐と大尉がこんな会話をしているのだ、他の人からしてみれば怖くて逃げ出すだろう。

・・・佐官にタメ口、ただ事では済まないからだ。

「ローベル大尉、その辺どうなんですか？」

「うん、脳筋はいるよ」

「即答ですね」

ローベル大尉は即答だつた。

「そろそろ行こうか、皆

「了解！」

ユウ・カジマは4人を連れて女神のいる医務室へと向かつた。

医務室についたユウ・カジマ達。

ふたつのベッドには患者用の衣服を着て拘束されている二人の女神。

丁度検査が終わつたらしく、女神達は入室してきたユウ・カジマ達に顔を向ける。

女性医務官のフェリーエ中尉が椅子から立ち上がる。

「お待ちしてました艦長」

「待たせてすまない、二人の容態は？」

「バイタルは正常、一人は軽い打撲だけです」

ゲン・タチバナがジエガンのシールドで海に叩き落とした痕が出来てしまつたようだ。

「それで？」

「・・・二人とも頑なになつて話そうとしません」

「そうか・・・、すまんが話をさせてほしい」

「はい」

フェリーエ中尉は白衣を着て部屋を出る前にゲン・タチバナに声をかけた。

「ゲン、調子はどうかしら？」

「良好ですよフェリーエ中尉」

「そう、また暇なときに来なさいな」

フェリーエ中尉は医務室を後にした。

医務室には女神二人とユウ・カジマ達の四人だけとなつた。

ユウ・カジマはベッドに近づき口を開く。

「私はこの艦の艦長を務めているユウ・カジマだ。君たちの所属や階級、名前を聞かせてほしい」

「・・・テロリスト共に口を開くつもりはない」

女神達がユウ・カジマ達を睨み付ける。

女神からしたら俺達はテロリストらしい。

そもそもそうだ、何の前ぶりもなくユウ・カジマ達が突如この世界に現れたのだから。

「参つたな・・・この世界じや俺達はテロリスト扱いらしい」

ユウ・カジマはそういうつて溜め息をついた。

おそらく原因は自分にあると考えたゲン・タチバナはユウ・カジマに伝える。

「艦長、女神が完全に敵対しているのは自分が原因だと思います」

「タチバナ少尉？」

「あの時私はビームサーベルで一人の女性を焼き殺してしまった」

「・・・なるほど」

理解したバルト中佐はそういうつて腕を組んで壁に寄りかかり、ゲン・タチバナが話そ  
うとしていたことを口にした。

「敵に戦友を殺された、その仇撃ちである敵に話す舌など持たないと・・・」

「よせよバルト、お前らエコーズからしてみれば素人以下の兵士なんだろうがそれが普通なんだよ」

エコーズの隊員は一人になつてでも感情的にならず冷静に特殊任務を遂行するよう訓練されている、要は完全な殺戮兵器だ。

敵に戦友を殺されたらその敵を恨み復讐するのが普通なのだ。

「だがなフォード、彼女達は日本国自衛隊という組織から出撃要請されたのだろう？普通ならば自衛隊という組織が我々を対処するはずだ。だが最初から彼女達が来た、つまり彼女達は特殊部隊かもしれないだろ」

ゲン・タチバナは彼女達に顔を向ける。

一人が殺意の籠つた目でゲン・タチバナを睨み付けていた。

「貴様が・・・貴様が殺したのか!?」

「そうだ、俺が殺したんだ」

「よくも・・・ッ!!」

突然彼女が暴れだすが、ベッドに取り付けられている拘束具で起き上がることはできない。

「この化け物が！レーザーで焼き殺すなんて・・・人の殺し方じやない、お前らは化け物

だ!!

パンツ!!

乾いた音が部屋に響き渡る。

ゲン・タチバナは彼女の頬を平手で叩いたのだ。

突然のことによウ・カジマ達は驚いていた。

ゲン・タチバナは彼女の腕を強く掴む。

「正しい殺し方なんてあつてたまるか!!俺達は兵士だ、けどな…好きで人殺しやつて  
るわけじゃない!!俺達は…守るために戦っているんだ!!それに今回仕掛けてきたの  
はお前らだろ!?通信で聞いてたけど、好き勝手言つて攻撃したのはどこの誰だよ!!」

「タチバナ少尉!」

ユウ・カジマにもう止めろと言われ、ゲン・タチバナは彼女の腕から手を離す。

ゲン・タチバナは踵を返し、医務室の扉を開ける。

「タチバナ少尉、何処にいくんだ」

「…MS巡回の交代がありますので、自分はこれで失礼します」

そういつてゲン・タチバナは医務室を退室した。

「すみません、自分もMS巡回の交代がありますので失礼します。…あとそこの嬢ちゃん、俺の部下が悪いことをした。だがあいつの言つた事は心に留めておいた方がいい」

彼女にそういう残し、フォード隊長は医務室を後にした。

「ローベル、あの坊主がキレるなんて珍しいな」

「でも彼の言うとおりだと思いますよ、俺達は好きで殺しをしてる訳じやないですから」

「言い方を変えれば残酷だが、殺しが仕事でもある」

「矛盾しますけど、それが軍人なんですね」

女神達に再び顔を向けると一人は涙を流して泣いていた。

もう一人は怯えて固まつてしまつた。

「これでは話を聞くことすらできないな・・・」

ユウ・カジマは困り果てた。

最初は相手が怯えないようにして話を聞こうとしていたが結局怯えてしまつた。

それがこの結果である。

「すまないがバルト中佐とローベル大尉は2人の監視をしてくれないか?」

「了解しました」

「お任せください」

互いに敬礼をし、ユウ・カジマは医務室を後にした。

一方MSデッキでは、整備員が数人集まつてある話をしていた。

なんでもゲン・タチバナが珍しく機嫌を悪くしていくて、カタパルトでMSを発進させ

る際に今まで見たことのないような速度で飛び出し、それを慌てて追いかけたフォード  
隊長がいたらしい・・・。

## 別世界の人間との接触

太平洋上空。

ペガサス・コーウエン周辺の上空を4機のMSが編成を組んで巡回していた。先頭はフォード隊長とゲン・タチバナが操るスタークジエガン。

その後ろにジエガンD型が2機。

4機ともサブフライテッドシステムであるベースジャバーに乗つて飛行している。ゲン・タチバナがメインモニターを操作しているとサイドモニターが通信モードに切り替わりパイロット全員の顔が映し出される。

フォード隊長と、ノーベンバー2のハリヤ中尉、ノーベンバー4のリエ少尉だ。

ハリヤ・クラウスはノーベンバー大隊の副隊長であり、ノーベンバー2としてフォード隊長の傍らにいる。

ハリヤ中尉もバルト中佐と同じく幼なじみらしい。

ノーベンバー4のリエ・キサラギはゲン・タチバナの幼なじみで、彼と共に連邦軍に入隊し数少ない女性パイロットとして活躍している。

本来大隊長は佐官クラスが務めるが、元ノーベンバー1だったユウ・カジマはフォー

ド隊長を隊長に任命し彼にノーベンバー大隊を託している。

「それにしてもゲン、どうしたの？・スラスター全開にして飛ばしてくるなんて」  
リエ少尉はゲン・タチバナがスラスターを全開にし超高速で飛んできたことに驚いた  
ようで心配していた。

「別に、何でもないよ」

「そのわりには不機嫌じやない」

「・・・・・」

「おいフォード、タチバナ少尉が珍しく不機嫌だな」

「ああ・・・それなんだがな。ゲンが叩き落とした女神を救出しただろ」

「らしいな」

「つい先ほど目を覚ましたようでな、艦長達と一緒に話を聞こうとしたら女神がゲンに

この化け物が！あんな人の殺し方じやないって言われてからこの調子だ」

「あー・・・あれば、嫌なことがあつたから全速力でかつ飛ばして忘れようとしたつてや  
つか」

「ま、そんなところだな」

「ゲン・・・」

確かにゲン・タチバナは彼女の友人を殺した、これに変わりはない。

『この化け物が！レーザーで焼き殺すなんて……人の殺し方じやない、お前らは化け物だ！』

彼女に言われたことを思い出してしまい、操縦桿を握っている拳に力が入る。  
そんな事はわかっている、だが……戦争で正しい人の殺し方などない。

戦場で撃たれたらそれで終わりなのだ。

〈やれやれ〉

すると突然、ハリヤ中尉のジエガンがベースジャバーから飛び上がり、ゲン・タチバナのスタークジエガンが乗つているベースジャバーに乗り移った。  
衝撃が全身を襲つた。

「ハリヤ中尉!?」

〈落ち着けよゲン〉

ハリヤ中尉のジエガンがスタークジエガンの肩に装備されている3連装ミサイル・ポッドに手をのせた。

〈考えてもしやあないだろ、もう気にすんなよ〉

「……はい、ハリヤ中尉」

〈おう！さてせつかくだし、巡回も兼ねてレースでもするか？〉

〈馬鹿言わないでくださいよハリヤ中尉！ジエガンがスタークジエガンに付いていける

わけないじゃないですか!」

「面白え、ならこつちはハンデとしてベースジャバーなしで飛んでやる

「そんな無茶な・・・」

いくらスタークジエガンが重力下でも運用できるようになつていても、変形できるMSと違つて長時間の飛行はできない。

それに宇宙と違つて大量の推進剤を消費する。

切らしたら海水浴確定だ。

「だが飛ぶだけじゃつまらない、妨害ありだ」

そういつてフォード隊長機のスタークジエガンはビームライフルを腰部にマウントし、ガツツポーズ。

要はMSの腕を使つての妨害ということだ。

「・・・壊したら整備班に怒られるつてはつきり分かるんだよね」

「私は後ろでのんびり飛ぶから」

「ビリになつたやつはそいつの秘密を暴露な

「別に私にやましいことなんて・・・」

「そうか? 前に体重計に乗つて悲惨な顔をしたのはどーのどいつだつたかなあ

「なッ!? どうしてそれを!?

〈おいハリヤ、詳しく〉

〈おうよ、実はな・・・〉

〈ハリヤ中尉!! それに隊長まで!?〉

「やれやれ、何してるんだか・・・」

3人を見てゲン・タチバナは呆れて苦笑いをする。  
すると突如レーダーが警告音を鳴らす。

それがこつちに向かってきている。

「フォード隊長! 何かがこつちに向かってきています、恐らく・・・」

「ああ、女神だろうな。また仕掛けてくるかもしけん、迎撃態勢をとるぞ!」

「ノーベンバー2、OK!』

「ノーベンバー3了解です」

「ノーベンバー4了解!』

メインモニターを操作し、3連装ミサイル・ポッドを起動。

その後操縦桿のスイッチを操作しビームライフルを構え、向かってくる方向に銃口を向ける。

〈んじや俺は戻るぜ〉

ハリヤ中尉のジエガンが元々乗っていたベースジャバーに飛び移る。

〈ペガサス・コーウエン、こちらノーベンバー1。巡回中レーダーに感あり、数は8でこちらに向かってきている〉

フォード隊長がペガサス・コーウエンに緊急連絡をする。

サイドモニターが再び通信モードに切り替わり、艦長の顔が映し出される。

〈こちらペガサス・コーウエン、了解した。本艦はこれより第1戦闘配備に移行する、ノーベンバー小隊は迎撃態勢！攻撃を受けるまで攻撃しないでくれ〉

〈ノーベンバー1了解！お前ら、聞いての通りだ、こつちからは絶対に攻撃するなよ〉

「了解！」

〈俺とゲンはシールドを持つていない為機動で回避する。ノーベンバー2と4は持つてるシールドで攻撃を防げ〉

〈ゲン、気を付けてね〉

〈当たんじやねえぞフォード！〉

ハリヤ中尉とリエ少尉のジエガンが後ろに下がりシールドを正面に出して構える。

前衛はフォード隊長とゲン・タチバナ。

隊形を崩さずそのまま向かってくる方向に飛行する。

レーダーが徐々に反応が近づいてくる事をパイロットに知らせ続ける。

有効射程範囲に入り、MSのセンサーが敵を捉えて周囲モニターがそれを印で囲む。

操縦桿のボタンを押してロツクオン。

ビームライフルの銃口が目標を追尾する。

〈俺が声をかける、撃つなよ〉

フォード隊長にそう指示され、引き金から少し指を離し、いつでも攻撃できるようにする。

彼は女神に対し呼び掛けを開始する。

〈こちらは地球連邦軍、ペガサス・コーワエン所属のノーベンバー小隊だ。貴機はペガサス・コーワエンの周辺警戒域に侵入しようとしている。直ちに停止し、こちらの指示に従え。そちらからの攻撃を受けた場合、我々は貴機を迎撃する。繰り返す、こちらの指示に従え〉

フォード隊長は繰り返し呼び掛けを続ける。

しばらくするとレーダーに表示されている反応がぴたりと動きを止め停止した。

それを確認したハリヤ中尉はフォード隊長に報告する。

〈フォード、反応がぴたりと止まつたぜ〉

〈確認した、接近する〉

フォード隊長機に続き、ゲン・タチバナはペダルを少し踏み速度をあげる。

その後ろにハリヤ中尉とり工少尉のジエガンが続いた。

メインカメラが反応の正体をはつきりと捉えた。

相手は・・・女神だった。

だが違和感を感じたゲン・タチバナはメインモニターを操作し気になつた相手をズームして確認する。

7人は女性で一人は・・・男だった。

「男? 女だけじやなかつたのか?」

〈あの時は女しかいなかつたからそう呼ばざるを得なかつたんだろうさ〉

フォード隊長はそろいいながら散開して目標を中心に旋回し続けろと指示する。

それに従い照準を目標に合わせたまま旋回をし続ける。

〈貴機らの停止を確認した、代表または責任者は誰か? 所属と目的を明らかにされたい〉

フォード隊長の呼び掛けに1機の女神が反応する。

どうやら彼女が部隊長のようだ。

〈我々は臨時編成されたIS学園所属のものだ。我々の目的は、そちらが捕えているIS操縦者の救出とIS本体の回収、そして・・・太平洋に浮かんでいる巨大戦艦および貴官が操縦している人型巨大兵器の調査の為だ〉

IS学園?

となると今ここにいる女神は学生だということか？

ゲン・タチバナは8機の女神を見つめる。

この前襲撃してきた女神と違い、それぞれが独特な形をしている。

格闘に特化していそうな純白のパワードスーツを纏つたイケメン男に深紅のパワードスーツを身に纏つたボニー・テールの女、紫色で後ろに球体のようなものが浮いているパワードスーツを見に纏つたツインテールの女。

青のパワードスーツで両手にスナイパーライフルらしきものを持つ金髪縦ロールの女に、巨大な砲身を肩に装備した黒のパワードスーツを身に纏つた銀髪で眼帯をする女・・・いや少女。

前に見た女神のパワードスーツとは少し似ていて、色がオレンジで大きな盾を持つ金髪縦ロールに続いて同じく金髪の女。

その隣に前に襲撃してきた女神と全く同じパワードスーツで両手に多銃身のガトリング4門を装備した巨乳の・・・失礼ショートの緑髪で眼鏡をかけた女。  
〈ゲン、今変なこと考えてなかつた？〉

「え？ いや、何も考えてないよ」

＼＼＼＼＼

通信モニター越しでリエ少尉に睨み付けられた。

そして部隊長らしき者は黒髪を肩あたりで束ねていて目付きが据わっているのか、あるいはこちらを睨み付けているだけでそう感じるのか。

簡単に言えばちょっと怖い感じの女性だつた。

他のパワードスーツと違ひ特徴がなく、手には長い刀が握られている。

〈要は我々に接触することが目的ということか?〉

〈そうなる、我々は今までの経験上そのような巨大な人型兵器を見たことがない〉

〈・・・こちらとの接触は、国の命令によるものか?〉

〈国際IS委員会による命を受けている〉

「国じやない?・・・混乱してきた」

「私も何がなんだかさっぱり」

〈奇遇だな、俺もだ〉

ゲン・タチバナとリエ少尉の会話にハリヤ中尉が入ってきた。  
ハリヤ中尉も理解できずにいた。

理解できないのもそのはず、彼らはこの世界のことについての情報が全くないのだ。

〈これは直接艦長に聞いてみるしかないな〉

フオード隊長はやれやれといった表情で艦に連絡する。

〈ペガサス・コーチエン、こちらノーベンバー1。艦長〉

「ユウ・カジマだ、どうした?」

「こちらの呼び掛けに女神が応じました、どうやら女神は例の2人の救出にきたようです……」

フォード隊長は女神達がこちらとの接触を希望していることをユウ・カジマに伝え る。

相手はI.S学園と名乗つており、パワードスーツを身に付けているのは学生である。そして……女神の中に一人の男性もパワードスーツを身に付けていることも報告する。

ひとまずユウ・カジマは、相手に男性がいたことから女神と呼ぶのは難しいと考えた。  
「仕方ない、今はこの世界の情報が欲しい所だったんだ。2人はまともに話を聞くことができない状況だからな、接触に応じよう。ベネズ中佐」

「はい、こちらの兵器等の知られると今後に響く可能性のある技術すべてを相手に見せないよう対処した方がいいかもしません」

「そうだな、その件に関してはベネズ中佐に任せる」

「了解しました」

艦橋でユウ・カジマとベネズ中佐は話し合いしてフォード隊長に向き直る。

「というわけだ、この艦まで相手を誘導してくれ。なお、武装の解除を徹底させてくれ。

MS巡回はシエラ大隊に引き継がせる

「ノーベンバー1、了解。女神……いや、目標をペガサス・コーウエンに誘導する  
フォード隊長は艦との通信を切る。

「聞いたな、俺達はこれより目標を艦に誘導する」

「おいおい大丈夫かよフォード、艦にこいつらを迎え入れたら……」

「その点は問題ない、艦長達が対処している所だ」

「そうか……まあ艦長命令なら仕方ないな」

「でもいい機会かもしません、俺達にこの世界の情報が全くありませんでしたから」

「そうね、私もゲンと同じ考え方です」

「確かにそうだな」

何て会話をしていると、目標から通信がきた。

長く待たせてしまつたようだ。

「おい、我々はいつまでこうしていればいい？」

「おっと、相手さんご立腹のようですね」

「待たせてすまない、艦長と連絡を取つていた。接触の件に関しては了解した、これより貴機らを艦に誘導する。武装は解除し、我々の指示に従え」

「了解した」

目標は展開していた武器を消した。

それを見たハリヤ中尉とリエ少尉は驚く。

ゲン・タチバナとフォード隊長は前の戦闘でそれを目にしている。

「え・・・武器が消えた!?」

「おい・・・今コイツらその場で武器を消しやがったぞ!?」

「俺達の知らない技術ってやつだ、行くぞ。IS学園所属のもの・・・といったか、我々に続いて飛行せよ」

そういうつてフォード隊長機のスタークジエガンは進路をペガサス・コードウェンに向けた。

目標は全員フォード隊長の後に続く。

その目標の左右にハリヤ中尉とリエ少尉のジエガン。

後方にゲン・タチバナのスタークジエガンが続く。

こうして、ユウ・カジマ達は初めてこの世界の人間をペガサス・コードウェンに招き入れる。

世界はまた刻々と変わろうとしていた・・・。

## 歓迎の握手

目標を引き連れてペガサス・コーワエンに向かつてゐるフォード隊長達。

コツクピット中で小腹が空いたゲンは巡回の時に持ち合わせていたゼリードリンクを口にしていた。

それを通信モニター越しで見ていたリエ少尉は呆れていた。

〈またゼリードリンク飲んでるの?〉

「うん」

〈ご飯ちゃんと食べてるの?ずつとそればっかりじゃない〉

「食べてるけど、巡回してるとき暇なんだよ・・・。何か口にしてないと落ち着かないからこれにしてる。これならコツクピット汚さないし、何より早く済ませられるからすぐに対処できるよ。それに・・・太らないし」

〈ゲン、今すぐ墜としてあげるね〉

リエ少尉のジエガンが銃口をゲンのスタークジエガンに向けるとロックオン警報が鳴り響く。

完全にロックされている。

「ちよ、それ洒落にならないんだけど!? ほら！ 目標が驚いてるよ!」

リエ少尉のジエガンはビームライフルを降ろしロツクオン警報が鳴り止む。

〈着いたら覚えててね、ゲン?〉

「は、はい……」

〈フォード、……うちのエースは味方を墜とす教育を受けたのか?〉

〈だとしたら怖いぜ、後ろに気を付けないとな。……特にリエ少尉には〉

〈隊長、何かいましたか?〉

〈いや！ 何でもないッ!〉

リエ少尉は最高の笑顔で隊長に声をかけていたが彼女の目は笑っていなかつた。

こんなやり取りを聞いていたのか、目標達は複雑な表情をしていた。

ふと、誰かに見られているような気がしたので目標にメインカメラを向ける。  
向けられた視線は男のものだつた。

気になつたゲンは声をかける。

「じつとこつちを見るようだけど、何かな?」

こつちを見ていることがゲンに気づかれた男は慌てながら返事をする。

〈あツ・・・いえ、何でもありません。ただ・・・〉

「ただ?」

〈本当に大きな機体だなって思つて……。最初はテレビで見たけど、実際に見ると本当に大きいなって思つてたんです〉

「それもそうだ、このスタークジエガンは19・2mの巨人なのだから。

「そつちから見れば当然だよね……」

〈これつてどうやつて操作してるんですか？それに貴方はその機体の何処に？〉  
「あー……、それについては今は答えることができないんだ。すまない」

今の質問に答えたらこちらが危ない。

操縦方法はともかく、コツクピットの場所がバレてしまえば確実にコツクピットめがけてピンポイントに攻撃されてしまうからだ。

〈いえ……こちらこそ機密事項を聞いてすみません〉

「あ、ああ……」

別にコツクピットの場所は機密事項ではないが、ここは別世界。  
下手に技術を流出するわけにはいかない。  
すると目標の部隊長から通信がきた。

〈私の生徒が失礼した、謝罪する〉

「いえ、お気になさらず」

そしてまた沈黙の時間。

再び気まずくなつた雰囲気にゲンは落ち着かなかつた。

通信モニターを見るとフォード隊長達は苦笑いをしていた。

暫くすると艦が見えてきた。

レーダーが艦から出撃した機影を感じする。

IFF照合、ペガサス・コーチエン所属のシエラ大隊、RGZ-195 リゼルだ。飛行形態のリゼル4機はこつちに接近すると人型に変形する。

巡回交代に来たらしい。

〈こちらシエラ、交代する〉

〈こちらノーベンバー、お願ひします〉

指揮官同士が敬礼をすると4機のリゼルは再び飛行形態になり飛んでいった。リゼルを目にした目標は驚愕していた。

それもそうだ、別の巨人が存在していて、しかもそれが変形したのだから。

艦の前方にあるカタパルトに機体を向けて高度を落とす。

目標もそれに続いてカタパルトめがけて高度を落とした。

フォード隊長機から先に着艦し、次に目標達が着艦。

それに続いてハリヤ中尉・リエ少尉・ゲンが順に着艦した。

〈こつちだ〉

フォード隊長のスタークジエガンは足音を響かせてMSデッキに入る。

中ではユウ艦長やベネズ中佐、エコーズのバルト中佐とその隊員が数名銃を持って待機していた。

「あそこで艦長がお待ちだ、そこでパワードスーツを解除しろ」

目標はそれに従いパワードスーツを解除、水着の様な格好を晒した。

その水着の様な物もそれぞれ違っていた。

そんな彼女達をエコーズの隊員が直ぐに囲んだ。

「俺達も降りるぞ」

フォード隊長の指示で機体を格納しコックピットハッチを開く。

機体から降りてヘルメットを一斉に脱いだ。

機体には整備員が集まり作業を始めた。

フォード隊長の元に集合し、彼は艦長に報告する。

「フォード・ファーミング以下3名、目標をつれて参りました」

「ご苦労」

敬礼し、腕を降ろす。

ユウは艦長は彼女達に向き直り、顔を開く。

「地球連邦軍所属、ドゴス・ギア級3番艦ペガサス・コーウェンの艦長を務めている、ユ

ウ・カジマ大佐だ」

「I S 委員会の代わりで来ている。I S 学園の教師、織斑 千冬だ。そして彼女は……」

「同じく教師の山田 真耶です」

あの巨……ゲフン、眼鏡をかけた人は教師だったことにゲンは少し驚いてしまつた。

「その後ろにいる若い少年と少女達は学生かな？」

「そうだ」

「そうか……では、ペガサス・コーワエンへようこそ、この海域まで御足労頂き感謝する」

「こちらこそ、接触に応じたことに感謝する」

ユウ艦長は織斑 千冬と名乗った女性と握手をかわす。

「さて、話し合いの場へ案内といきたいが……まずはパワードスーツを一時的に預からせてもらう、いいかな?」

千冬は暫く考え込むと、素直に従う。

「わかった。お前達、I S を預けろ」

千冬の指示に従い彼女達はアクセサリーの様なものをバルト中佐に預ける。

それを見たユウ艦長とベネズ中佐、バルト中佐は首を傾げた。

「これがそうなのか?」

「I-Sは待機状態になるところなる、機体ごとに形は違う。渡したI-Sは各国の専用機で国家機密の塊でもあり本来渡すことは出来ないがな」

「助かる、艦内でいきなりパワードスーツを展開して暴れられても困るからな・・・。國家機密ならそれなりの扱い方を約束する。直接私の元で監視しながら一時的に保管して置く。それと・・・」

ユウ艦長は彼女達の姿を見る。

「その格好では寒いだろう、こちらで羽織るもの用意してある。まずはそれからだ」「気遣いに感謝する」

ユウ艦長はベネズ中佐に更衣室へと案内しろと指示するが問題が一つ。

彼女達の中に男子が混じっているのだ。

思い付いたユウ艦長は、ゲンに声をかける。

「あー・・・、すまないがタチバナ少尉。彼に服を貸して貰えないだろうか?」「了解、丁度部屋に作業服があります」

「助かる、着替えが済み次第艦長室へと案内してくれ。フォード大尉達は解散してくれ、巡回ご苦労だった」

「了解!!」

ユウ艦長は艦長室へと、ベネズ中佐は彼を除いて千冬達を連れ更衣室へと向かつた。

エコーズのバルト中佐と隊員達はそれに続いた。

「んじや頑張れよゲン」

「お疲れさん！」

「ゲン、大変だろうけど頑張つて。何かあつたら連絡して

「ありがとう、リエ。お疲れさん」

「うん、お疲れ様」

リエ少尉とゲンはハイタッチし、彼女は自室へと向かつた。

ここに残されたのはゲンと少年だけとなつた。

「さて、それじゃ行こうか。えっと・・・」

「織斑 一夏です」

「織斑？」

「はい、織斑 千冬の弟です」

「あの人の中佐なんだ、成る程・・・。俺はゲン・タチバナ少尉だ、よろしくな一夏」

「さつき通信で答えてくれた人ですよね、あの時はすみませんでした」

「いや、気にしなくてもいいよ。さて、待たせると行けないから着替えに行こう」

「はい、作業服お借りします！」

礼儀のいい少年だなと思ひながら一夏と共に歩き出す。  
しかし・・・

「・・・あ」

「どうかしたんですか？」

ゲンはその場であることに気づいた。

「なぜエコーズの隊員が一人もいないんだ」

目標を監視するはずの隊員が一人もこちらに振り分けられていなかつた。

「??」

「監視がいないけど・・・まあいつか」

考えるのを止めて一夏をゲンの自室に案内した。

# 置かれて いる状況、迫り来る嵐

一夏を部屋に連れていき作業服に着替えるように指示したゲンは部屋の外で待機する。

暫くすると一夏が部屋から出てきた。

言われた通り、ちゃんと作業服を着ている。

「お、着替えたか」

「お待たせしました！」

「ん、様になつてゐなあ」

「あ、ありがとうございます！つていうか、これ本当に作業服なんですか？制服っぽい感じがするんですけど・・・」

「ああそれ？フライトジャケットだよ、MSの整備作業やると服が汚れるからね。俺は作業服として使つてるけど、一応規則で所属・階級・氏名をつけなきゃいけなくてさ」

一夏はフライトジャケットの肩につけられているパッチや胸のネームパッチ等を確認する。

すべて英語でかかれているが、一夏は読めないようだ。

「これ・・・何て読むんですか?」

「上腕部についているのは右が地球連邦軍で左がノーベンバー大隊、胸についているパッチは右から俺の名であるゲン・タチバナで左がペガサスコーウェン所属つて書いてあるんだ。首の襟についているのは少尉の階級章だ」

「地球連邦軍?」

「まあ、そのうち艦長が教えてくれるよ。さて、艦長を待たせてしまうといけないから行こうか」

「はい!」

ゲンと一夏は艦長室へと向かつた。

艦長室。

ゲンと一夏がまだ来ていないため、ユウ艦長と先に来ていた千冬達は部屋でのんびりしていた。

緊張しつぱなしで力んでいたが今は皆脱力モード。

ユウ艦長は取り出し淹れたての紅茶を注いだティーカップを彼女達に渡す。

「どうぞ」

「あ、ああ・・・気遣い感謝する」

「ありがとうございます」

ユウ艦長はどういたしましてといい、椅子に座る。

「それにしても、学生を連れてくるとは思わなかつた。・・・我々があれを墜としたのは知つてるかな?」

「・・・ああ、今も世界で報道されている」

「君達からすれば巨人に殺されてしまう、我々から見ればまた攻撃を受けてしまう。我々は今そんな状況だ。・・・そして我々は一人の女性を殺めてしまつた。それは彼女を殺めた彼自身が良く知つてゐるだろう」

「彼・・・?」

「ノーベンバー3、男子生徒と通信で会話していたゲン・タチバナ少尉だ」

「ツ!!」

彼女達はつい先程まで一緒にいた男の顔を思い出していた。

通信で会話を聞いていた時は女性パイロットと仲良さげに会話をしていた。

・・・途中その彼女がゲンの機体に銃口を向けた事に驚いたが。

「表には出していないだろうが、心中では重く考へてゐる。彼は特殊だからな・・・」

千冬は彼が特殊である理由を聞こうとすると艦長室の扉が開く。

入ってきたのは丁度話題になつていていたゲンとフライトジャケットを来た一夏だつた。

「ゲン・タチバナ少尉、連れてきました」

「ありがとうございます。・・・ライトジャケットか」

「普段は整備服として使っています」

「成る程、さて始めるとしよう」

ユウ艦長はインターでベネズ中佐とバルト中佐を呼び出した。

その間にゲンは一夏を椅子に座らせ扉の横に立ち休めの姿勢をとる。  
暫くするとベネズ中佐とバルト中佐が入室した。

「失礼します」

「お待たせしました艦長」

一人はユウ艦長に敬礼し、彼の左右に並び椅子に座る。

「タチバナ少尉、君も座つてくれ」

ユウ艦長にそう言われたゲンは戸惑う。

「いえ、しかし・・・」

「坊主、こういう時くらい楽にしろ。力みすぎなんだ」

「・・・ありがとうございます」

バルト中佐に言われたゲンは空いてる席が一夏の隣なのでそこに座る。

「さて、君達が気になつてゐる我々の事から話そう」

ユウ・カジマは語り始める。

宇宙でこの艦の試験航行をしていた、しかし通信不調で誰とも繋がらず帰還するが、発射されたレーザーに飲み込まれ氣づけば太平洋上にいた。

現状が分からず偵察を行い、ここがユウ艦長達が知る世界ではないことを知る。

味方がおらず、命綱がない状態で別世界に来てしまったユウ艦長達は『女神』に囲まれ呼び掛けを受けた。

しかし話が噛み合わず、敵による艦やMSの鹵獲を防ぐ為に自衛手段を取ると通告した。

相手は挑発行為だと言つて攻撃、戦闘となつてしまつた。

その時の通信記録があるのでそれを彼女達に聞かせた。

戦闘は一時間程度で終わり、『女神』を1機消滅、2機は中破し救出した。

救出した二人から話を聞こうにも、仲間を殺されたことで敵対心が大きくなり出来そ  
うになかった。

艦が下手に動けば領海に侵入してしまい攻撃を受けるかもしけない為この海域で停止し偵察を続けている。

そして彼女達がユウ艦長達に接触し今に至る。

「命綱がなく補給の目処がない今、艦やMSの整備は近い内に出来なくなる。人員に関

しても食糧や水も不足してきている為、先が見えずにいる」

「別世界とはまた信じがたい事だな」

「信じられないかもしないが、現に我々はこの世界に来てしまった」「・・・・」

この世界に地球連邦軍や袖付き、MS等も存在しない。

ましてや宇宙に住む人口もいない。

そして最大の特徴とも言える一年戦争の大きな傷口、コロニーの落ちた地も存在していなかつた。

「あの、お聞きしたいことがあります」

山田真耶と名乗っていた女性が口を開いた。

「何か？」

「話を変えてしまうんですけども、あの巨大人型兵器について・・・」

「ああ、それについてはパイロットであるタチバナ少尉に話してもらおう」

いきなり指名されたゲンは立ち上がつた。

「いいんですか？あれについては・・・」

技術を外部に流さないように対策しているはずだ。

「偵察で出撃させているし、それに彼女達は間近で見てしまつていて。MSが何かを説

明するだけでいい

機体の性能を説明する必要はない。

ただ名前だけ知つていれば大丈夫だという考え方のようだ。

「…分かりました。あれはMSと言つて、人間がパイロットとして搭乗する有人兵器です。MSには多くの機種があり、重力下の地上でしか使えない機体と無重力の宇宙でしか使えない機体があればどちらも運用できる機体も存在します。また変形して飛行することができる機体もあります」

「あの時変形した機体がそうなんですね」

「はい、そうなります」

「ご丁寧にありがとうございます」

ゲンは一通り説明は終わらせて席に座る。

「MSの機体のスペック及び武装等はこの世界に大きな変化をもたらす可能性があるとして明かすことができない。その点は了承してもらいたい」

「…分かった」

「では次に、そちらからこの世界について教えていただきたい。我々はこの世界の情報が全くなくて途方に暮れている最中なんだ」

「私でよければ説明させてもらう」

続いて織斑千冬による、『インフィニット・ストラトス』が存在する世界の説明が始ま  
る。

太平洋上空。

ノーベンバー小隊と巡回を交代したシエラ大隊のリゼルは4機編隊で飛行していた。

〈こちらペガサス・コーワエン、現在艦長達が会談を開始しました〉

〈シエラ1了解、こちらも現在異状はない〉

リゼル指揮官機の隣にシエラ2のリゼルが隣接する。

〈隊長〉

〈どうした?〉

〈空を見てください、これ結構荒れるんじやないですか?〉

リゼルのパイロット達はメインモニターでオートパイロットのルートを更新し全天  
周囲モニターの上を見る。

徐々に雲が空を覆つていき、周囲が暗くなつてくる。

暫くすると雷が鳴り出し、風も強くなつてきていた。

〈こりや嵐になるかもな〉

〈機体に雷が当たるとヤバイですよ〉

「そうだな。ペガサス・コーワエン、こちらシエラ1。太平洋上空の気象に変化あり、強風に雷、嵐になる可能性がある。飛行に支障が出るため、機体の保護も兼ねて帰還する」

「こちらペガサス・コーワエン、了解。直ちに帰還してください」

「了解」

4機のリゼルは隊形を崩さず進路を艦に向けて帰還する。

太平洋上の気象は徐々に悪化、雨が降りだし雷が鳴り響いた・・・。

## 感じた瞬間豪雨の中を駆ける

艦長室で千冬達と会談を進めていた最中、机のインターフォンがなる。

ユウ艦長は席を立ち受話器を取る。

相手は艦橋のクルーからだつた。

「艦長だ、何があつた？」

〈艦長、会談中すみません。巡回に出ていたシエラ小隊から報告があります〉

「敵か？」

〈いえ、気象の変化です。ひどく荒れるらしく、巡回に支障が出るため機体の保護も兼ねて帰還させています〉

「分かつた、艦のカタパルトデッキをすべて閉鎖してくれ。あと揺れによる被害対策を艦内全てに促してくれ。気象が荒れている間は巡回を中断する」

〈了解しました〉

受話器を定位置に戻し、千冬達の元に戻る。

気になつたベネズ中佐がユウ艦長に訪ねる。

「艦長、どうかしましたか？」

「気象の変化だ。荒れるらしいから巡回に出ているシエラ小隊を帰還させている、あと揺れの被害対策を促すよう指示したところだ」

すると艦内のスピーカーから放送が流れる。

〈艦内の全乗組員及び待機中のパイロット等に通達。現在、巡回している小隊からの報告で艦が浮上している海域の気象が変化したこと。暫く気象が荒れるため巡回は中断、全乗組員及び待機中のパイロットは揺れによる被害対策を実施せよ。また、MSに関してはすべて格納せよ。繰り返す〉

放送が終わると部屋の外が騒がしくなる。

全ての乗組員と待機していたパイロット達が一斉に動きだし、被害対策を始める。

MSデッキでは機体が格納され動かないよう固定される。

整備員は置かれている物品すべてを倉庫に格納したりワイヤー等で壁に固定したりする。

居住区画では手空きの人員が荷物をロッカーに押し込む等慌ただしく動いている。

「では念の為私は艦内を見て回ります。終わり次第艦橋にいますので」

「すまない、任せる」

ベネズ中佐はユウ艦長に敬礼をし、退室した。

それに続きバルト中佐も座っていたソファーから立ち上がる。

「艦長、私も失礼します。巡回がなければ、隊員を休ませます」

「そうしてくれ、そのうち特殊任務があるかもしれないしな」

「了解」

バルト中佐は敬礼して直ぐに退室した。

その後バルト中佐がエコードの隊員に休みだと告げると隊員達は歓喜の声をあげたとか。

こうして艦長室に残つたのはユウ艦長とゲン、千冬達だけとなつた。

「さて、聞いての通りだ。気象が荒れて外は危険だが・・・君達はどうする？」

千冬と山田先生は困つたなと溜め息をついた。

「出されば今すぐに委員会に報告したいところだ。・・・すまないが送り迎えを頼めないか？」

彼女達はそれでも帰ろうとしていることに対しゲンは無理だと伝える。

「そんな無茶な、外は嵐ですよ？」

「タチバナ少尉のいう通りだ、それに我々は揺れによる被害対策で機体は全て格納しているので出せないんだ」

ゲンのスタークジエガンもすでに格納、固定されている。

艦長がモニターで外の状況を表示すると、外は豪雨に見舞われていた。

空は雷が鳴り響いていた。

「これじゃ雷に当たつて機体はブラックアウト、最悪墜落ですね」

「I Sにはシールドエネルギーがあるし、絶対防御というものがある。が・・・さすがにこの嵐の中を突っ切る気がしないな」

千冬は暫く落ち着くまでここに残るしかないと考え込む。

そこでユウ艦長はある提案をした。

「我々としては、さすがにこの状況で帰れなんて鬼のような事は言わないさ。落ち着くまでこの艦にいるといい。部屋を用意するからそこで休んでくれ」

「助かる、また世話になる」

「ああ、気にすることはない。のんびり過ごしてくれ」

「いいんですか艦長」

「大丈夫だ、対策はすでにしてある」

ユウ艦長はインターフォンの受話器を手にして耳に当てる。

相手は恐らくベネズ中佐だろうか？

千冬達の部屋を用意するように伝えると通話を終える。

「すまないが部屋を用意するのに少し時間がいる、暫くここで待っていてくれ」

「いえ、用意してくださるだけでもありがたいです」

となれば自分の役目はもうない。

ゲンは艦長室を退室することにする。

「艦長、自分はこれで失礼します」

「M Sの調整か？」

「はい」

「少しは休んだらどうだタチバナ少尉？」

「しかし・・・」

「それ以上リミッターを外せば機体が耐えられない。・・・また追い付けなくなってきたのか？」

「はい・・・。艦長、やつぱり自分は」

「それでも君は人間だ、そう考えるのは良くないと言つただろう。・・・機体に関してはこちらでまた考えよう、だから君も休むんだ。いいか？」

「ありがとうございます、では」

ゲンはユウ艦長に敬礼し艦長室を退室した。

太平洋上空。

雲の上を一本の筋を引いて飛行している物体がいた。

その飛行物体は真っ直ぐとペガサス・コーワエンが浮上している海域へと向かっている。

その飛行物体の中で投影型のキーボードを高速で打ちながら機械を操作している者がいた。

メインモニターに表示されているのは、ハッキングしたGPSから撮影した太平洋上に浮上している巨大戦艦ペガサス・コーワエン。兎耳をつけ特殊な格好をした女性は表示されているペガサス・コーワエンを真剣に見つめている。

艦の上にはISを1機消滅させたMSが何機か立っていた。

「ISを消滅させる程の巨人、出来たら捕獲したいなあ。・・・最悪の場合、破壊すれば問題ないよね？」

そんな彼女は笑っているが目だけは笑っていなかつた。

その目が、彼女の作ったISのコアを消滅されたことによる怒りなのか、或いは今までに無い技術を前にしての喜びか恐怖の目なのか。  
それを理解するものは誰もいない。

「ツ!？」

自室に戻ろうとしたゲンは何かを感じた。

これが何なのかは彼自身にもよく分からぬ。だが、彼の本性がこう告げている。

・・・何かがこつちに来ると。

ゲンはMSデッキに格納されている自分の機体へと全速力で走る。そんなゲンを見かけた整備員が突然どうしたんだと声を書けるが彼はそれを無視して走る。

通路を歩いていたフォード隊長がゲンを見つける。

「ん？ おいゲン、どうしたんだ？ 深刻な顔しながら走つて、何かあつたのか？」

「何かがこつちに来る！ 急がないと・・・！」

ゲンはフォード隊長を避けて走り続けた。

避けられた彼はゲンの後を追いかける。

「おい待てゲン！ お前・・・何かを感じたのか？」

「はい、でもこれが何なのか分からぬんです！ ・・・はつきりわかるのは、それが近づいてきてるつて事です!!」

「ツ!!」

フォード隊長は思い出した。

こんな事が前にもあつた、こうなつた時のゲンは・・・敵がいる事を感じた時だ。

「最初は信じちやいなかつたが、これで確信した。艦長の言う通りだ、まさかゲンがニユータイプだとはな・・・」

MSデッキに到着したゲンとフォード隊長。

ゲンはそのまま自分の機体に乗りスタークジエガンを起動させる。  
いきなりの事で下で作業をしていた整備員が混乱していた。

「ゲンと俺の機体を起動する!!すまんが急いでるんだ、MSの拘束具を強制解除した後カタパルトデッキを開けてくれ!!」

それを聞いた整備員はいう通りに動く。

機体の拘束具が強制解除される。

起動を完了したゲンとフォード隊長のスタークジエガンは武器格納庫からビームライフルを装備しそのままカタパルトデッキに向かう。

カタパルトデッキが開かれ豪雨がMSデッキに入つて床を濡らす。

ゲンは機体の機能点検を終えると機体の足を電磁カタパルトに固定する。

サイドモニターが通信モードになりフォード隊長の顔が映る。

〈突然の事なんだ、ベースジャバーは直ぐには出せない。推進材を大量に消費する覚悟はあるか?〉

「香気な事いつてる場合じゃないですよ！このまま行きます！」

「だな、お前から行け！俺は後から行く、何かあつたら直ぐに言えよ！」

「了解！！・・・ゲン・タチバナ、ノーベンバー3、行きます!!強制射出ツ!!!」

足のペダルを一気に踏み込み操縦桿を操作すると機体が強制射出される。強烈なGがゲンの体を襲う。

スラスターを全開にしたスタークジエガンは飛び上がった。

それに続きフォード隊長機のスタークジエガンも強制射出、ゲンのスタークジエガンを追いかけた。

豪雨の中、2機のスタークジエガンはベースジヤバーなしで雲の上まで上昇した。

徐々に艦に向かっている飛行物体と2機のスタークジエガンの距離が縮んでいく。またしても緊迫した事態となつてしまつた・・・。

# 特攻してくる野菜とMS

千冬達を部屋へ案内しようと彼女達を連れていたユウ艦長は突然鳴り響いた艦内警報に驚き通路の壁に設置されているインターフォンから受話器を取り耳に当てる。

「ベネズ中佐か？何があつた！？」

〈艦長！タチバナ少尉とファーミング大尉がMSを強制射出しました！その後直ぐにレーダーがこつちに向かつてくる機影を捉えました〉

ベネズ中佐の報告を聞いた途端、ユウ艦長は考え込む。

ゲンとフォード隊長がMSを強制射出。

そしてその後にレーダーでこつちに向かつてくる機影を捉えた。

ゲンをよく知るユウ艦長はその答えを出した。

「まさか・・・タチバナ少尉はそれを感じ取つて動き出したのか？だとしたら・・・彼はニユータイプとして覚醒を始めている事になる。これで確定したな」

〈艦長？〉

ベネズ中佐に呼び戻されたユウ艦長は考えるのをやめて直ぐに指示をする。

「第一戦闘配備だ！敵は？」

〈数は1、艦の射程圏内に入りました!〉

「MSは下手に出せない、タチバナ少尉とフォード大尉に任せん! 艦の火器管制で対応だ! 撃たれるまで撃つなよ!」

〈了解!〉

受話器を定位置に戻し、千冬達に向き直る。

「部屋に案内する前に艦橋へ向かう。すまないが君たちには同行してもらう」

「どういう事だ? この件でIS部隊は出さない事になつてゐるはず・・・」

「敵は単機で突っ込んできているらしい、敵か味方かを君たちに確かめて貰いたい。時間がない、付いてきてくれ」

「分かつた、行くぞ」

「はいッ!!」

ユウ艦長達は急いで艦橋へと走り出す。

太平洋上空。

雲の上に出たゲンとフォード隊長のスタークジエガン。

ベースジャバーが無い今、2機供海面に落下しないようスラスターを高出力のまま維持し辛うじて飛行している。

その為メインモニターに表示されている推進材の残量ゲージが通常よりも早く減少している。

レーダーはまだ敵を捉えていない。

しかしゲンはすぐ目の前に迫つてきている事を感じた。

「来た!!」

「どこだ? レーダーに反応はないが・・・」

「あれです!」

ゲンは操縦桿のスイッチを操作し、スタークジエガンは右手にビームライフルを装備。

銃口を向かつてくる方向に向けた。

照準を手動で行い、マーキングをする。

〈そこか!〉

小さくて識別できなかつたがそれが徐々に接近している。

やつとの事でレーダーが反応を感知し、天周囲モニターが機影をマーキングした。

照準を自動に切り替え、ズームして確認をしたゲンはその飛行物体を見て困惑した。なぜならその飛行物体は・・・

「え・・・、人參?」

「おいゲン、俺達幻想でも見てるのか？ありや……人参だよな？」  
「人参……ん？」

そこで気づく。

人参の頭からジエット噴射口が見えた。

形的には人参だが、どうしても挙動が……巡航ミサイルに見えてしまう。

「おいおい……ふざけてんのか？人参の形をしたミサイルだあ！？」

ゲンはまたしても違和感を感じた。

人参の形をしたミサイルなら、なぜそこから人の気配を感じるのだろうか？  
そんな事を考えていたその時、人参型のミサイルが急に方向を変えた。

方向を変えたそれは……明らかにゲンとフォード隊長の機体に狙いを定めていた。

「こいつ！？フォード隊長逃げて下さい！特攻して来ます!!」

「特攻！？人が乗ってるのかッ！」

操縦桿を操作し、機体を急旋回。

向かつてくる人参型ミサイルを避ける。

避けたはずのそれがまたこつちに向かつってきた。

「やつぱり……人が乗っているのか!!」

すると突然ロックオン警報が鳴り響く。

人参型ミサイルから・・・ミサイルが発射されたのだ。

〈嘘だろ!? こいつミサイルを生産しやがった!!〉

「それ冗談にならないですよ!! 攻撃を受けました、迎撃します!!」

接近してくるミサイルを頭部バルカンポッドで迎撃する。

迎撃されたミサイルはその場で爆発、爆煙から人参型ミサイルが出てきた。

〈こいつ・・・しつこいな!?〉

フォード隊長のスタークジエガンは3連装ミサイル・ポッドからミサイルを全弾発射。

放たれたミサイルは人参型ミサイルの前で爆散、散弾が飛び散る。

しかし命中することはなかつた。

〈避けやがった!?〉

フォード隊長は空になつた3連装ミサイル・ポッドを切り離さずに回避しビームライフルを撃ち込む。

ゲンは人参型ミサイルがフォード隊長に気を取られている間に後ろに回り込みミサイルを全弾発射する。

ミサイルが爆散し飛び散つた散弾はやつとの事で人参型ミサイルに命中した。操縦桿のスイッチを操作し、ビームライフルに切り替える。

ジェット噴射口から黒煙を吐いた人参型ミサイルはそのまま落下して爆発するかと思ひきや……。

その場でミサイルが空中分解を起こし中から何かが出てきた。  
出てきたのは……。

「なるほど……中にISが入つてたのか!!」

〈つまりあれは移動用のオプションつて事かよ……やられたぜ!!〉

ISの操縦者をメインカメラがはつきりと捉えていた。

彼女の目は……完全に獲物を捕らえる気満々の目だ。  
すると突然ゲンの頭の中で声が響いた。

「ツ!!……なんだ?」

(こいつ、ビームを出した……完全に東さんの知らない技術がある!)

「通信? いや違う、これは……」

(機体は無理そうかなあ……ビームを出す銃本体なら行ける!)

するとISがこつちに真っ直ぐ突っ込んできた。

狙いは……スタークジエガンが手にしているビームライフルだ。

「殺意がない? 齢獲ることが目的か!! フォード隊長ツ」

〈絶対に歳獲されるな、最悪破壊しろ!〉

「了解!!」

狙いを定めてビームライフルを発射する。

しかし相手は小さい故速すぎる為に放ったビームを避けられてしまう。  
「落ち着け・・・動きが早いならそれに合わせて・・・」

照準を手動に切り替える。

「そこだッ!!」

操縦桿のトリガーを素早く引いた。

銃口から放たれたビームは敵に命中したが・・・健在だった。

「これがシールドエネルギーってやつか！」

〈ゲン！一旦離れろ!!〉

フォード隊長のスタークジエガンは頭部バルカンポッドで敵を牽制する。

ゲンは機体を敵から離す。

（今ツ!!）

「?」

離れた敵から複数のワイヤーが射出され、ビームライフルに巻き付いた。

I Sは小さい癖にパワーが異常で機体ごとに引っ張らせてしまう。

ゲンはすぐにビームライフルを手放し頭部バルカンポッドで攻撃。

もろに弾を浴びたビームライフルはその場で爆散した。

(破壊されちゃった!? 技術は渡さないってことかな!)

「さつきから何なんだ！」

即座に武器を切り替える。

前腕部追加装甲からビームサーベル本体が射出されそれを装備する。本体からビームの剣が出現し構える。

〈援護する!〉

フォード隊長のスターク・ジエガンがビームライフルの銃口を敵に向けて発射しようとしたその時……。

〈待てッ、戦闘を停止せよ!〉

サイドモニターが通信モニターに切り替わりユウ艦長の顔が映しだされる。

〔艦長!〕

〔二人とも無事のようだな、そのISを攻撃しないでくれ〕

〔艦長、我々はこのISとやらに無茶苦茶な攻撃を受けたんですが?〕

特攻使用の人参型ミサイルにそこから放たれた複数のミサイル。

そしてISによるビームライフルの歯獲。

殺意はなかったとしても攻撃してきた事に変わりはない。

それに相手はビームライフルを鹵獲して技術を手に入れようとした。  
完全に攻撃対象だった。

「実はな……彼女はＩＳの創設者、篠ノ野東本人で千冬の親友らしい」

戦闘は記録され當時ペガサス・コーウェンに送信されるよう設定されていたのでその記録を見て戦っていた相手が千冬の親友だと識別できたのだろう。

しかもその相手はこの世界に存在しているＩＳの創設者である篠ノ野東本人。

しかも彼女を撃つたら世界は黙つていない。

この世界では超が付くほどの最重要人物なのだから。

ちなみにフォード隊長はこの世界の知識をゲンから聞き出していた為状況をすぐに理解していたた。

「あつぶね!?俺達危うく世界の敵になるところでしたね……」

「間一髪つてところですね……了解、武装を解除します」

ゲンとフォード隊長は操縦桿のスイッチとメインモニターを操作して武装を解除する。

機体の点検をすると推進材が残り僅かとなつている事に気づく。

「フォード隊長、そろそろ限界です」

「了解。艦長、この者はどうします?」

〈すまないが連れてきてくれ〉

〈了解〉

「でもフォード隊長、雲の下は嵐ですよ？」

雲の下は未だに豪雨で雷が鳴り響いている。

このまま彼女を飛行させるのは危険だ。

〈ガキのころ飛び回る蝶を捕まえて手の中に包んだことないか？〉

「あー・・・なんとなく記憶はあります。でも兎ですよ？」

〈違ひねえ、やつてみな〉

「了解です」

通信設定を変えて彼女に呼び掛ける。

「すみません、ご同行願います」

〈・・・キミ、何で私の動きが分かつたの？〉

「は？」

〈私の動きが全部読まれてるようを感じた、何で？〉

なぜか彼女は物凄く不機嫌だった。

それもそうだ、彼女の欲しがつていた技術の固まりであるビームライフルが目の前で破壊されたのだから。

「何でつて言われてもなあ・・・」

すると警告音が鳴り響く。

メインモニターに目を向けると推進材が空になつた事を知らせてきていた。

「ヤバッ!? フォード隊長！」

〈俺もヤバイぜ！ 降りるぞ〉

「了解！ すみません、荒くなりますが貴女を連行します！」

機体の手の平に彼女を乗せてもう片方の手で落ちないようそつと包み込む。

〈ちよ、何するのさ!? 束さんはデリケートなんだぞ!!〉

急にブンブン怒りだす彼女。

どう反応したらいいのか分からずゲンは苦笑い。

徐々に高度が落ちていき、機体は雲の中に突入した。

〈んじや帰ろうか。ノーベンバー1、帰還する〉

「ノーベンバー3、帰還します」

艦に帰還の連絡をした後、ゲンとフォード隊長のスタークジエガンは篠ノ野束を連れて艦に無事帰還した。

その後整備班からの報告で出撃した2機は推進材が完全に空になつていたらしく、よく墜落しなかつたなど感心したゲンとフォード隊長は一度とあんな無茶はしないとお

互いに誓つたらしい。

## ニユータイプと告げられた彼

MSを格納したゲンとフォード隊長は困り果てていた。

別に機体が故障してしまったとかではない。

原因はスタークジエガンの脚部で必死にしがみついている兎耳をつけた女性にある。因みにその機体はゲンの専用機だ。

「姉さん・・・いい加減離れて下さいッ!!」

「イヤーダアーッ!!これを分解するまで絶対に離れないもん!!」

近くの整備員は分解する気か!?と困った表情をしている。

それに分解されでは困る。

彼女によつてこの世界に存在するはずのない技術が流出してしまう可能性がある為だ。

駄々を捏ねる彼女を見た千冬は大きな溜め息をつく。

「この機体にはタチバナ少尉が乗つているんだつたな、見苦しい所を見せてしまつてすまない。それに大事な機体を・・・」

「いえ・・・確かに分解されちゃ困りますけど、触るぐらいなら何ともないですから」

「そういって貰えると助かる」

千冬はそういって駄々を捏ね続けている彼女の元へ。  
どこから出したのか、千冬の手には出席簿が出現し振り上げられ、それが兎耳をつけた彼女の頭に振り下ろされる。

広大なMSデッキ内に乾いた音が鳴り響いた。

それを聞いたフォード隊長は咳く。

「お～いい音してんna。この世界じや出席簿は兵器なのか？」

「そんなわけないでしよう・・・」

もう何がなんだか分からぬ。

ゲンはこの状況を理解できなかつた。

「いつたあ～い!! もうちーちゃん何すんのさ!!」

「大人にもなつて駄々を捏ねるな馬鹿者! それと彼に謝れ」

千冬はそういつてゲンに指を指す。

兎耳をつけた女性はゲンに顔を向けると急に目が鋭くなる。

すると彼女が動き出した。

「ツ!!」

とつさに反応したゲンは後ろに下がる。

ゲンがさつきまで立っていた位置に彼女が着地した。

しかし油断してしまったゲンは腕をがつちりと捕まれてしまう。

彼女の鼻先がゲンの鼻先につく勢いで彼女は顔を近づけてきた。

必然的に彼女と目が合つたゲンは固まってしまう。

暫くすると彼女の方から口を開いた。

「……やっぱりだ。今の反応の良さ、普通の人間よりも能力が高い。ねえキミ……  
さつきの質問に答えてなかつたよね？」

「し、質問……？」

「何で私の動きが読めたの？」

あの時と全く同じ質問をされたゲンは答えようがなかつた。

何せゲン自身がニユータイプである事を自覚していないからだ。

答えられずにいると……。

「それはタチバナ少尉がニユータイプだからだ」

声がした方に顔を向けると、そこにはベネズ中佐を連れたユウ艦長が立つていた。

「ニユータイプ……俺が？」

「ああ、タチバナ少尉の高すぎる反応速度が原因でMSが追いかつたんだ。

あの時何かを感じたのだろう？ニユータイプは……人並み外れた直感力と洞察力、並

外れた動物的直感。そして空間認識能力を持つていて独特の脳波を発すると言われている。恐らくタチバナ少尉は空間認識能力で彼女が来たのを感じたのかもしれない」

「その様子だとキミ……自覚してなかつたんだ。でも今の説明で納得したよ、気になつてたんだ。普通の人間にしては反応が良すぎる、それに私の動きが正確に読み取れてた。普通ならこんなことあり得ない」

彼女は掴んでいたゲンの腕から手を離しユウ艦長に向き直る。

「地球連邦軍所属、ドゴス・ギア級3番艦ペガサス・コーワエンの艦長、ユウ・カジマ大佐だ。ここに来たと言うことは、何か用があつて來たのだろう」

大体予想は出来る。

彼女は・・・篠ノ野束はこの世界に存在するISの創設者だ。

世界で467個しかないISのコアの内1つを完全消滅させてしまつたのだ。

彼女が黙っているはずはない、そして彼女直々に出向いて來た。

「・・・・・」

急に黙つてしまつた彼女にユウ艦長は困つてしまふ。

何か気に触ることを言つたかとベネズ中佐に聞くと彼女もさつぱりと答える。すると千冬が前に出てきた。

「すまない、束は親しい人物か興味のある人物にしかあまり口を開かないのにな・・・」「そうか・・・、ならこの件はタチバナ少尉に一任する」

「艦長!?」

丸投げされたゲンは思わず声をあげてしまった。

ゲンは彼女に腕を捕まれるなり質問をされたりしたが仲がいいわけではない。

それに一度戦った間柄で、敵対心もあるかもしれない状況でユウ艦長にこの件を一任されてしまつたのだ。

ゲンが驚くのも無理はなかつた

「そんな絶望したような顔をしないでくれ、フォローはする。何かあればすぐに駆けつけよう」

ユウ艦長は千冬達に顔を向ける。

「色々とありすぎて皆疲れているだろう、今日はもう休もう。貴女方にはすでに部屋を用意してある、気象が落ち着くまでゆっくりしていくってくれ。もちろん篠ノ之博士にも部屋を用意する。それまではタチバナ少尉が案内してくれるはずだ。ではどうぞごゆっくり」

ユウ艦長はこのあとやることがあるので失礼すると一言言い残し、ベネズ中佐を連れてMSデッキを後にした。

残されたゲンは未だに状況が整理できずにフリーズしている。

そんな彼にフォード隊長が声をかける。

「とんだ災難だな、ゲン」

「勘弁してくださいよ・・・どうしたらいいんですか」

「とりあえず彼女達を案内してやつてくれ、MSに関しては俺が全部やつておく」

「すみませんフォード隊長」

「気にすんなつて！・・・ゲン、お前がニュータイプだとしても俺は今まで通り接していく。俺だけじゃない、ユウ艦長や大隊の皆もそう言うさ。お前は人間であることに変わりはないからな。気負うなよ」

「はい！」

「んじやな！」

フォード隊長は軽く敬礼をして整備班と合流し整備や戦闘記録の解析を始める。

残されたのはゲンと千冬達だけとなつた。

気まずい雰囲気だが、こうしていても仕方がない。

吹っ切れたゲンは彼女達を部屋に案内する。

「あー・・・、聞いての通り案内役を任せられましたゲン・タチバナ少尉です。至らない所があるかもしれません、宜しくお願ひします。何か分からぬ事があれば聞いてくだ

い

「それじゃしつつもん!!」

またしても篠ノ野博士に質問を受けてしまった。

千冬はまたかと呆れ、山田先生は困惑している。

一人の少女が顔を真っ赤にしているのはなぜだろう?

「えっと・・・何でしようか?」

「キミが乗つてたのつて、モビルスーツ? っていうんだよね!」

「え、ええ・・・そうですね」

ゲンは愛機であるスタークジエガンを見上げる。

今は整備されている為、所々装甲が外されている。

「モビルスーツというのは総称で、機体にはそれぞれ種類があります」

「ふうん。でもでも、ここには似たような機体しかないよ?」

「ここにはノーベンバー大隊の保有するMSが保管されています。大隊によつて保有する

MSが異なり、別のMSデッキに分けられています」

彼女達は興味深々に話を聞いてくれていた。

「あの・・・」

次は珍しく一夏が質問と言つて手をあげる。

「ん？」

「M Sには種類があるんですね？名前とかつてあるんですか？」

「もちろんあるよ。今ここにある機体は R G M - 8 9 ジエガン D 型、地球連邦軍の主力量産機です」

「これが量産機・・・」

千冬はそう呟いていた。

彼女達からしてみれば、こんな巨大人型兵器が量産されているのかと考へるだけで恐ろしく思ふだろう。

だがそれはこちらの世界での話、ゲン達のいた世界ではそれが当たり前なのだ。

「でもタチバナ少尉の機体だけ何か違いますよね？」

「お、いいところに気づいたね一夏。機体自体は一緒だけど特務仕様になつていてるんだ。R G M - 8 9 S スタークジエガン、簡単に言えばジエガンのバリエーション機になるね」

暫く質疑応答を繰り返したゲンは時計を見る。

かれこれ 30 分くらいここにいるのでそろそろ案内を始める。

「さて、色々聞きたいことはあると思いますがそろそろ部屋に行きましょうか。付いて

来てください」

ゲンは彼女達を連れて居住区画へと向かつた。

# 本来の用途から外れた I S、戦争の為に造られた M S

彼女達を部屋に案内した後ゲンはまたしても M S デツキへと足を運んでいた。

皆疲れていたのだろうか、寝息をたてて寝てしまつた。

一夏もゲンの部屋にある誰も使用していないベッドで寝ている。  
M S デツキに到着すると同時に格納されているジエガンのコツクピツチハツチが開いた。

中から出てきたのはリエ少尉だつた。

「リエ？」

「ゲン、案内がてら休憩してたんじやなかつたの？」

「案内は終わつたよ、皆部屋に入るなり疲れて寝ちゃつたんだ」

「そつか」

リエはリフトから降りてゲンに歩み寄る。

彼女の手には M S の整備に使われた端末があつた。

「整備終わつたのか？」

「うん、丁度今終わつたところ。ゲンは？」

「休憩したから機体の整備確認でもしようかなって」

「・・・本当に休んだの？早すぎない？」

「大丈夫だつて」

「そんなこと言つて、ゲンつてばいつつも無理するんだから！この世界に来てからの出撃回数が多いのはゲンとフオード隊長だけよ？フオード隊長はさつき部屋で爆睡してたけど、ゲンは動きっぱなしじゃない」

「ちゃんと休んでるから大丈夫」

「はあ・・・まあ、言つても無駄なのは幼いときから知つてる。けど無理だけはしないでね？」

「うん」

「もう遅いから程々にしてね、おやすみなさい」

彼女はそういつてMSデッキを後にした。

腕時計を確認してみると時間は22時になつたばかりだった。

MSデッキを見渡してみると、殆どの整備員は自室に帰つていていない。

愛機であるスタークジエガンの足元で機体を見上げる。

整備が完了していて、外されていた装甲が元に戻されていた。

リフトに乗り機体のコックピットまで登つて中にはいる。

コツクピットのモニターを操作し電源を入れる。

動力の始動はしない。

モニターを操作するだけなので動力を使う必要が無いからだ。

「．．．ひとまず機能点検だ」

モニターを操作し、機能点検を始める。

光学カメラに異常はない。

周天囲モニターにノイズがないか、表示を何回か変えて異常がないことを確認する。整備上がりなので設定がリセットされている所をもう一度設定する。気づけば時間は23時になっていた。

「ん．．．もう1時間たつたのか」

手についていた端末を操作し、整備リストに確認した項目をチェックをしていく。一通りチェックを終えたゲンはコツクピットシートに座つたまま背伸びをする。「もう終わつた？」

「うわあッ!?」

「痛ッ!!」  
声をかけられてビックリしたゲンはシートから転がり落ちる。

「およよ? 大丈夫?」

コックピットのハッチに座っている人物を見たゲンは驚く。

そこには・・・部屋で寝ていたはずの篠ノ之博士がいた。

「な・・・何で篠ノ之博士がここにいるんですか!?」

「何でつて・・・もちろんこのMSっていうのが気になつてるから!」

「はあ・・・機密事項なのに・・・」

コックピットの中を彼女に見られてしまつたゲンはひとまず機体の電源を落とす為、モニターを操作しようとするが・・・彼女に止められてしまう。

「何をしようとしてるのかな?」

「整備を終えたので電源を落としているんです。手を離して貰えませんか」

「嫌

「離してください」

「嫌

「はあ・・・」

あまりにも頑固過ぎる彼女にゲンは溜め息をついてしまう。

これ以上彼女にこのMSに使われている技術を見せる訳にはいかない。

こうなつたら最終手段。

外部から強制的に電源を落とすしかない。

「すみません、そこどいてもらつていいですか？」

「お、私に見せてくれる気になつたのかな!?」

「いや、機体から降りたいだけなんですが・・・」

「電源落とさなくていいの?」

「ロツクかけたのでもう操作できませんよ」

篠ノ之博士がハツチからリフトに移動した。

ゲンはこの時を待っていた。

「ツ!!」

「ツ!?

ゲンはコツクピットから飛び出し、リフトには乗らずにそのまま機体から飛び降りる。

機体は立たせて格納してあるのでそれなりの高さはある。  
着地に失敗すれば骨折は免れない。

「嘘!?この高さから飛び降りた!?さては外部から電源を落とす気だね!」

「気づいた時にはもう遅いです!!」

無事着地に成功したゲンは M S デツキの操作端末まで走り、素早く操作して電源を強制的に落とした。

機体の電源を落とす事に成功したゲンは機体の足元に戻り篠ノ之博士に呼び掛ける。

「いつまでもそこにいないで降りてください」

「むく・・またしてもキミにやられた。この艦の艦橋とか機関室等にも入れなかつたし」

「何て事してくれてるんですか貴女は・・・」

彼女はリフトで機体から降りる。

「何で束さんに見せてくれないのさ」

「・・・・・貴女と一緒にだからです」

「え?」

「貴女がこの世界で I S を造つて世界を変えてしまつたように、この M S ・・・いや俺達が持つ技術を流してしまえば、世界を大きく変えてしまうからです」

「・・・・・」

「ここにある M S 、俺達が今のつている艦は I S と違つて最初から戦争することを前提として造られている兵器なんです。こんな物がこの世界に流れてしまえば戦争になりかねない」

「戦争することを前提として造られたの・・・?」

「・・・はい、残念ながら」

彼女の表情が急に変わる。

格納されている M S に向けられている目は・・・恐怖の目だつた。

「貴女が今ここにある技術に手を出して何をしようとしているのか分からぬけどおすすめはしません。貴女は今まで通り今持てる最高の技術で I S を作り、研究していくばいい。じゃなきや、また同じ道をたどることになります。今の貴女は逃げているようにしか見えません」

「逃げてなんかないッ!!」

「・・・・・」

「I S は・・・本来なら宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・ステッツになるはずだつた・・・。私は I S を世界に広めようと発表したけど・・・皆して夢の産物だとか言つて認めてくれなかつた!だから私は・・・どんな手段を使つても I S を全世界に存在を認めさせた!でもそれが兵器として使われた・・・私はそれが許せない、だから私は世界を壊す。・・・今の世界はつまんない、大つ嫌いッ!!」

篠ノ之博士の大きな声が M S デッキ内に響いた。

気づけば彼女は泣いていた。

かなりのショックだつたのだろう。

自分の造つた発明品が、望まぬ用途で・・・戦場で使われた。

そして世界は間違つた方へと進み変わり果てた。

それがこの世界の・・・今の現状だつた。

「・・・世界を壊す事については考え直した方がいい。もう一度考えて、これからどうすればいいのかを決める。まずはそれからです」

ゲンはそう言いながら彼女の頭を撫でる。

我慢の限界だつたのか、彼女は突然ゲンに抱きつく。

困つたゲンは彼女を落ち着かせるために慰める。

彼女の鳴き声は・・・MSデッキ全体に響いていた。

# 答えを見つけた彼女は決意する

翌朝。

目が覚めたゲンは自室のベッドで固まっていた。

隣で寝ていた一夏も同様、目が覚めた途端に目を見開いた。

なぜならそこには・・・

「すう・・・すう・・・」

「なぜここにいるんだ・・・」

篠ノ之博士がゲンを抱き枕にして寝ていた。

起き上がるうとするも、彼女はゲンを離そうとしない。

腕力が強すぎて動けない。

彼女は昨日長い時間泣いていた。

それで泣き疲れてしまつたのだろうか、そのまま寝てしまつた為仕方なく自室の空いているベッドで寝かせていていた。

その後ゲンは自分のベッドで横になり眠りについていた・・・はずだつた。空いているベッドで寝かせていた筈の彼女がこうしてゲンに抱きついている。

「あの・・・タチバナ少尉、・・・何があつたんですか?」

「・・・見ての通り拘束されてる」

「逆に襲われたんですね・・・」

「一夏、頼むから誤解されるような事は言わないと助かるかな」と

すると廊下が騒がしくなる。

『篠ノ之、いたか!?』

『いえ、こつちには居なかつたです!』

『ど、どうしましよう織斑先生・・・もし篠ノ之博士がM Sを分解してたら・・・!!』

『教官!ここは艦長に報告して事態を知らせては?』

『セシリア、そつちにいた!?』

『こちらにはおりませんでしたわ!』

『これマジでヤバくない!? 戦争が起きちゃうわよ!!』

・・・・・・

「「すでに戦闘は始まつてるよ!!」

隣の部屋で寝ていた女子達が全員目覚め、篠ノ之博士を探していた。

「タチバナ少尉!」

「一夏、すまないが手伝つてくれ!」

「は、はい！」

一夏は彼女の両肩を掴み、ゲンは彼女から離れるも失敗。それを何度も繰り返すも失敗に終わってしまう。

「離れねえ・・・!!」

「何て腕力なんだ・・・！」

そして事態は悪化する。

『織斑先生！ そういえばタチバナ少尉の部屋つて隣ですよね！』

『確かにそうだつたな、お前達いくぞ！』

「そりやままずいだろ!?」

女子勢がこの部屋に迫り来る。

なんとしてでも彼女から離れるため一夏とゲンは協力して脱出を図るも失敗。

一夏はある提案をした。

「タチバナ少尉！ 隠れましよう!!」

「誤解を招きそうだけどこの際仕方ない、毛布を！」

一夏は隣のベッドから毛布を引っ張る。

それを彼女にかけようとしたときだった。

「すまないタチバナ少尉！ 束を見なかつたか!?」

扉が開き、千冬達がついに来てしまった。

彼女達はゲンと一夏を見て固まってしまう。

皆の視線がついに・・・寝ている篠ノ之博士に向いてしまった。

「・・・一夏、お前は何をしている」

「ち、違うんだ千冬姉・・・!!」

「ほう、何が違うのか説明してくれるか?」

「えっと・・・タチバナ少尉、正直に言つていいですよね?」

時すでに遅し、ゲンの隣にはいつの間にかドス黒いオーラ全開のリエ少尉がゲンの腕を掴んでいた。

「ねえゲン」

「な、何かなリエ少尉殿・・・」

「昨日ビームライフルの出力調整が終わつたから点検射に付き合つてくれない?」  
「え・・・?」

「ゲンが点検射の的ね。大丈夫よ、痛みなんかないわ・・・高出力だから」

ゲンは彼女に引きずられてMSデッキへと向かつていった。

・・・彼はいつの間にか篠ノ之博士から解放させていた。

「さて一夏、お前の相手は私だけではないぞ」

「？」

一夏は横を向く。

「織斑君……残念です。ここで命を落とす事になるなんて」

そういうつて涙をハンカチで拭く山田先生。

千冬の後ろには……鬼に成り果てた5人のラヴァーズ。

覚悟を決めた一夏は祈る。

「……タチバナ少尉、俺も逝きます」

「一夏あああああああッ!!!!」

こうしてゲンと一夏は女性陣に引きずられていつた。

ゲンの部屋に一人残つた篠ノ之博士。

彼女は仰向けになり微笑む。

「……私を泣かせた仕返しだよ、フフフツ」

最初から目覚めていた彼女はわざと寝たフリをしてゲンに抱きついていたのだ。

彼女はゲンがさつきまでかけていた毛布を抱き締める。

「……責任……とつてよね」

ゲンは2人分の食事をもつて医務室に来ていた。

「あら、今日はゲンが当番かしら？」

「おはようございますフェリー中尉」

「おはよう、一人なら起きてるわよ。優しくしてあげてね？」

「どうして皆して誤解するような事を・・・」

溜め息をつきながらゲンは医務室で休んでいる二人のいるところへ歩く。カーテンを開けると彼女達の視線はゲンに向けられた。

二人して怯えた顔をしていた。

「朝飯を持つてきたんだ、調子はどうかな」

「・・・・」

二人は答えてくれなかつた。

敵対心が消えることはない。

ひとまず艦長に頼まれた事を彼女達に伝える。

「無駄かも知れないけど君達に話していく。昨日IS委員会の代わりにIS学園の織斑千冬が俺達に接触してきた。目的は君達2人およびIS本体の回収、そしてこの艦と巨人の情報収集らしい。艦長はそれに応じて接触、会談を行つた。結果、君達は解放、織斑千冬達と国に帰還することになつた」

「ツ!!」

「また戦場でなんて事はないだろうけど、もし次会った時に敵だつたら……容赦なく墜とす」

伝えることを伝えたゲンは医務室を後にした。

それから数時間後。

M S デツキでは一機の M S が出撃準備を整えていた。

その足元では I S 学園に帰る千冬達とユウ艦長達が集まっていた。

捕虜となっていた二人は千冬達に引き取られる。

そして全員の I S が返還される。

それを受け取った彼女達は I S を点検し異常がないことを確認した。

「途中まではタチバナ少尉が M S で同行する」

「最後まで世話になつた、ユウ艦長」

「お互い様だ。我々の今後に関する件、よろしく頼む」

「全力で掛け合う事を約束する」

ユウ艦長と千冬は握手を交わした。

千冬はゲンの隣にたつている篠ノ之博士に声をかける。

「東、お前は今後どうするつもりだ? できればお前には私と同行してもらいたいんだが」

「・・・ちーちゃん、 私決めたんだ」

「束?」

「・・・姉さん?」

篠ノ之博士は千冬達の前に立つ。

彼女はどうやら決断したようだ。

昨日、ゲンが彼女に言つた事。

彼女はそれを考えてこれからどうすればいいのか、その答えを見つけたのだろう。

「私はISを・・・本来の用途として使われるようになつた」

「何・・・?」

「私ね、どうしても許せないんだ。本来ISは宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツ、そうなるはずだつた。けど・・・ISが兵器として使われ世界が変わつた」

「ああ、そうだな」

「私は今までずっと逃げ続けてきた・・・けどそれはもうおしまい」

「・・・・・」

「私は戦うよ、兵器として使われているISをすべて破壊して、ISを本来あるべき姿に戻すため」

「そうか」

「だから私は・・・この艦に残るから！」

「「はあッ!?」」

この場にいる全員が驚く。

彼女が突然この艦に残ることを堂々と宣言したからだ。

突然の事でユウ艦長とベネズ中佐も驚いている。

「正気が束!？」

「うん、正気だよ。それに・・・」

「「それに??」」

「こう考えるようになつたのはタチバナ少尉のせいなんだからね？その、責任・・・取つてくれるよね？」

「「はあああああああああああッ!?」」

ついには整備員までもが一緒にになつて驚いた。

名前を出されたゲンは困惑する。

「俺!？」

「タチバナ少尉!？」

突然千冬に肩を捕まれるゲン。

「東に・・・何をしたんだ!?」

「何もしてませんよ!?」

ユウ艦長は呆れて大きな溜め息をついた。

ベネズ中佐はゲンを睨む。

リエ少尉については笑っているが目だけは笑っていない。

「艦長! それにベネズ中佐!! 俺本当に何もしてませんから!! リエ、信じてくれよ!」

「ぷいっ」

「軽く無視された!」

このままではいつリエ少尉に撃たれてもおかしくはない。

「あ、あの!!」

「はいッ!!」

名前を呼ばれたゲンは振り向く。

篠ノ之東の妹、篠ノ之筈だ。

ゲンは恐怖した、彼女に何を言われるのか。

それはきっと自分の姉に何て事をしてくれたのかという怒りなのかも知れない。

「その・・・姉さんは色々と大変な人ですが、姉さんをよろしくお願ひします!!」

「そつちなの!?」

怒りではなく彼女をゲンに嫁がせる挨拶だつた。

「でもね……私一人じゃ不安なんだ。だから『ゲン』、私と一緒に戦つて欲しい、側にいて欲しい。ダメかな……？」

ゲンは彼女に頼まれてしまう。

彼女をこうさせてしまつたのは自分のせいだと考え溜め息をついた。

決断したゲンは答える。

「分かった、そう考えさせたのは俺だから最後まで付き合うよ」

「ツ！！……ありがとう、ゲン!!」

「あー……ベネズ中佐、彼女の部屋を用意してあげてくれ。後必要な衣類と……プラッタクコーヒーを頼む」

「了解しました。コーヒーについては丁度私も飲みたくて2つ用意しております、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

篠ノ之博士については艦長も許可してくれたようだ。

「やれやれ、すぐにでも掛け合う必要がありそうだな。ではそろそろ行くとしよう。東、

失礼のないようにな」

「うん！もちろんだよー！」

「・・・タチバナ少尉」

「はい」

「苦労するかもしけんが、束をよろしく頼む。何かあれば私に連絡してくれて構わない  
そういうつて千冬はゲンに連絡先の書かれたメモ紙を渡す。

ゲンはそれを受け取りポケットにしまう。

「ええ、任せました」

「フツ・・・束に先を越されるとはな。では行こうか」

「はい!!」

千冬達はISをその場で展開し、ユウ艦長達に一言挨拶をしカタパルトへ。

それに続きゲンも機体のコックピットに入る。

篠ノ之博士も一緒にいきたいと言い始めたので整備員に頼んで補助席を取り付けて  
もらつた。

彼女が補助席に座つた事を確認したゲンはモニターを操作してハッチを閉じる。  
機体の最終確認を終えたゲンは機体の動力を始動。

スタークジエガンが起動しバイザーに光が灯る。

駆動音が徐々にコツクピットに伝わつてくる。

「これが・・・MS」

「博士・・・いや束さん、貴女に言つておく事があります」

「うん・・・」

「本来ならこの世界に存在しない技術はすべて機密事項に指定されています。けど貴女は今こうしてMSのコックピットに乗っている。知つてしまつた以上、必然的に俺達と運命を共にする事になる。もし貴女が技術を流せば俺は貴女を撃たなきやいけない、その覚悟はありますか?」

「そうなつた時は間違つた私だから。・・・でも、ゲンが私を正してくれると信じてる」「・・・出会いつてからまだ間もないのに信頼してくれるんですね」

「ゲンがこんな私を受け止めてくれたからだよ?こんな事初めてなんだ、だからかな。ゲンなら信用できるって思つてる」

「そつか・・・。束さんのこれから戦いについても覚悟を見せてもらいました。下手をすれば世界の敵になる、後戻りは出来なくなります。それでも?」

「うん、やつと見つけられた私の戦いだから。もう逃げるだけの毎日はうんざり」「いい答えが見つかってよかつた」

サイドモニターが通信モードに切り替わる。

周波数を設定し千冬達と通信ができるか確認した。  
すると艦長の顔が映る。

〈タチバナ少尉〉

「艦長？」

〈見送りは途中まででいい、艦の射程圏内から出たら帰還してくれ〉

「了解」

〈それと……篠ノ之博士についてだが、我々もフォローする。詳細は帰還してきたら話そう〉

「すみません艦長」

〈気にするな、では気を付けて〉

「はい。……では東さん、行きますよ」

「うん、宜しくねゲン！」

「よろしく！……ノーベンバー3、ゲン・タチバナ、スタークジエガン……出撃します！」

ペダルを踏み込み、操縦桿を操作する。

機体が電磁カタパルトから射出され大空をかける。

後から射出されたベースジャバーに機体をのせて飛行、先行する千冬達の後ろにつき彼女達を見送る。

彼女達の報告と掛け合いがユウ達の今後を左右する。

彼らがこの世界で本格的に活動をするのも、そう遠くはないのかも知れない・・・。

# ペガサス・コーウェンの裏表、そして本来の姿

千冬達が日本へ帰つてから1週間。

ペガサス・コーウェンの乗員は今日も慌ただしく艦内で作業をしていた。今彼らが行つているのはペガサス・コーウェンの改修工事。

改修工事を決定したのには訳がある。

それは千冬達が帰国してから翌日のことである。

「ペガサス・コーウェンを完成させる」

「完成させる??」

ユウ艦長のその一言で艦橋に集められた手空きのフォード達は疑問に思つた。完成させるも何も、すでにペガサス・コーウェンは完成しており海面ではあるがこうして航行している。

この世界に来る前は宇宙で航行出来ていた。

ドゴス・ギア級2番艦の予備として造られたが、ペガサス・コーエンは3番艦として充分役割を果たせている。

完成しているはずなのに「完成させる」とは一体どういう意味なのだろうか。

「確かに、諸君の思つてゐる通りだ。しかしあくまでもこの艦は予備艦だ。詳しく述べネズ中佐が説明する」

ベネズ中佐は資料を艦橋にいる全員に配り、艦の大型モニターを使って説明を始め る。

「ドゴス・ギア級3番艦は2番艦ゼネラル・レビルの予備艦として急遽建造されたのは事 実です。そのため、2番艦との違いは全くありません。しかし司令部ではある話が持ち 上がつていきました。ロンド・ベル隊の旗艦であるラー・カイラムが地球でミノフスキー・ クラフト・エンジンを搭載し地球での重力下試験を実施していたようで、その試験をこ の艦にもやらせようという意見があつたのです」

「待つてください中佐」

話の途中でフォード隊長が待つたをかけた。

「3番艦、いやドゴス・ギア級 자체が宇宙での運用を前提に造られている筈では？」

「確かに、もし地球でも運用ができるとしたら艦の裏にも設置されているカタパルト デッキはどうなるんです？ 重力下で逆さまになつて射出なんて恐ろしい事、俺たちパイ ロットには出来ません」

フォード隊長の意見にハリヤ中尉も続いた。

重力下で逆さまになつてのMS射出。

パイロットからしてみれば恐怖でしかない、逆さまになつて落ちるのと一緒だからだ。

「そこは私も疑問に思いました。そこで命令書と艦に積載されている物品や機材、そして艦の設計書を再度確認してみた所分かったことがあります」

ベネズ中佐は大型モニターを操作し艦の設計書を映し出す。

「これが3番艦の設計書です。そして今から2番艦の設計書と重ね合わせます」

3番艦と2番艦の艦の構造が重なる。

この場にいる乗員はあるとこに気づいた。

先程ハリヤ中尉の言つていたMSのカタパルトデッキの話。

そのカタパルトデッキとMSデッキの構造だけが2番艦と異なつていたのだ。

「これは……」

「おいおい、これじゃ全くなじやねえか……！」

フォード隊長とハリヤ中尉は目を見開いていた。

「第1発見者である私も驚きました。艦に同乗していた建造メーカーの従業員にこれを見せたところ、これは地球での運用も考慮されて造られていたらしく、詳細な設計書を見せられていなかつた彼らはそれを知らなかつたようでした」

ベネズ中佐は大型モニターを操作し別の資料を表示する。

「なお、下部のカタパルトについてですが……地球ではMSの空挺降下用として機能するとの事でした」

「ちょっと待て、空挺降下となると……飛ぶのか？ 重力下で……この巨大な艦が！？」  
バルト中佐がそういうと乗員が互いに話し始めた。

聞いていた話と全然違っていたのだ。

「静かに！ ……思ふところはあるだろうが、まずは話を聞いてくれ。ベネズ中佐」

ユウ艦長は皆を黙らせ、ベネズ中佐に説明の続きを促す。

「はい、バルト中佐のいう通りです。信じがたい話ではありますが……積載されている物にミノフスキー・クラフト・エンジン本体とそれに関連する部品が確認されました」

「……」

「さらに、書類上では予備艦として就役と書かれていましたが極秘文章には新たな技術や機能を取り入れての評価試験艦として運用すると書かれていました」

「艦長、この事を最初から……？」

「バルト中佐、実は私も昨日知ったばかりなんだ。この極秘文章は定められた期日に開封し実行せよとかかれた命令書に同封されていたんだ。今はこの状況なので期日を前

倒しで開封したらこんな物が出てきたというわけだ」

「…申し訳ありません艦長、少し疑つております」

「気にするな。…というわけだ諸君、明日よりこの艦の改修工事を行いペガサス・コーウエンを本来の姿で完成させる。重力下での活動はミノフスキー・クラフト・エンジンが必要になる。時間がかかる事は分かっている、忙しくなるとは思うが協力してほしい」

「俺たちがこの世界で生き残る為ですからね、当然協力しますぜ艦長」

「自分もフォードと同じ意見です、30年で人生を終わりにしたくはありませんから」

「フォードとバルトの意見に賛成だ」

幼馴染み3人組であるフォード隊長とバルト中佐、ハリヤ中尉。

そして艦の全ての乗員もこれに賛成し協力することを宣言した。

それ以降艦内は大忙しで、今も作業員が急ピッチで改修工事を行つている。

当然、ミノフスキー・クラフト・エンジンを組み込む為に艦は動けない。

こんな時に襲撃されたらおしまいなのでMSのパイロットも総動員で巡回と警備を行つている。

改修工事を初めてから5日目、作業は70%が完了している。

ドゴス・ギア級3番艦、  
近づいてきていた。

ペガサス・コーワエンは・・・本来の姿として完成する日が

# 隠れた研究所に銀髪の少女

ペガサス・コーウエンの改修工事が行われている真っ最中、ゲンは特例で出撃していた。

何でも、束の研究所を艦内に移す為に必要な機材等を取りに行くためとか。命令では束の護衛としか聞かされていないためゲン本人も理由を知らない。護衛対象である束はというと・・・。

「・・・すう・・・ズズズ」

補助席で眠っていた。

無理もない、彼女がロケットで飛んで来る程の距離なのだ。

誰だつて眠くはなる。

操縦しているゲンも少し眠気に襲われている。

（ゲン、また昨日も無理したでしょ・・・高度が下がってきてるわよ）

サイドモニターが通信モードに切り替わりリエの呆れた顔が映し出される。

「ん？ああ・・・ごめん、ありがとう」

操縦桿を軽く握り直し高度を上げる。

束の護衛を命令されたのはゲンだけではない、今隣で飛行しているMSを操縦しているリエもだつた。

彼女はフォード隊長の愛機であるスタークジエガンを借りて出撃していた。完全武装のスタークジエガンにベースジャバーの2機編成。いつでも対処できるような装備での出撃だ。

しかしこの通り、何もなく静かで旅客機に乗っているかのような状態。つい気が抜けてしまう。

〈また寝不足ね・・・昨日は何時間寝たのよ〉

「んぐ・・・束に頼まれてた事があつて徹夜してたから4時間かなあ」

〈もうそれ仮眠つてレベルじやない・・・〉

「かもね」

〈もう、仕方ないわね・・・そつちに行くわよ〉

リエは操縦桿を握り、機体を操作する。

スタークジエガンがベースジャバーから立ち上がりゲンの方へと飛び移る。

衝撃で少し揺れたが直ぐに収まつた。

〈目的地までは私が操作するから、それまでは寝てなさい〉

「ん、今回ばかりはそうさせてもらうよ」

〈あ・・・珍しく素直に従うわね、自分でもヤバイって自覚してきたんだ〉

「うん、今回ばかりは・・・ね」

〈そう、後は任せなさい〉

「ありがとう」

通信モードから機体ステータス画面に切り替え、機体をこの体勢から動かないようホールド設定する。

補助席をみると今も変わらず束は眠っている。

それをみたら余計眠くなってきたのでゲンはシートに背中を預けて目をゆつくりと閉じた。

数時間後。

目的地付近に到着したゲンはリエに起こされ機体のホールド設定を解除し再び操縦桿を握った。

辿り着いたのは小さな孤島。

メインモニターで地図を表示しマー킹された所を確認する。

どうやらこの島が東の研究所らしい。

とはいっても上からみればただの島、研究所らしきものは見当たらなかつた。

「・・・ 束起きて、目的地に到着だよ」

「ん・・・・」

目を覚ました彼女は目を擦り起きる。

「着いたの？」

「うん、この島であつてる？」

周天井モニターにズームして拡大させた島を表示させる。

「あつてるよ」

「了解、浜辺だと見つかった時が面倒だから森林に着陸しよう」

（分かつたわ、ゲリラに気を付けてね）

「了解」

レーダーをよく確認しながら高度を下げ、森林の真上でベースジャバーをホバーリングさせる。

地上に異常がないかを確かめてから着陸した。

それに続いてリエの機体も着陸、暫く不在になるゲンの機体を護衛するために武装を開した。

機体を降りる前にゲンは携行する拳銃とアサルトライフルを点検し装備する。

それが終わり次第コツクピットハッチを開けて機体から降りる。

「地球の地面を踏むのは何年ぶりだろう・・・」

「ずっと宇宙にいたの?」

「生まれは地球だけど住んでたのがコロニーだからね」

「ふうん・・・」

機体を乗つ取られないように遠隔操作でコツクピットハッチを閉じる。

「さて、時間もあまりないからさつさと済ませよう。即席だけどベースジャバーにコンテナを着けてもらつたから機材はそこに、手で持つていけるものはコツクピットの下にポン投げかな」

「ほいほい！それじゃ研究所に案内するね！」

「二人とも気を付けて行つてね」

身に付けた通信機からリエの声が聞こえた。

「了解、俺の機体宜しくね」

〈任せなさいな〉

ゲンと束はその場を後にし研究所へと歩く。

途中野生動物に遭遇したりしたが10分程度で研究所の入り口らしい場所に到着した。

束は木の皮に触れると蓋の様に開く。

その中は暗証番号を入力するためのテンキーがあつた。

「これが入り口……遺跡みたいだね」  
「元々何かの遺跡だつたんだけど、東さんが大改造して研究所にしちやつた！」  
「それが世界遺産だつたらマズいよね……」  
「……バレンタインだよ、バレンタイン」

「聞かなかつたことにしよう」

もしこれが千冬に知られでもしたら面倒なのは確実だ。

張本人である東が怒られるのは勿論だが、巻き込まれる可能性がある。  
ゲンは聞かなかつたことにしようと自分に言い聞かせた。

とりあえず東と共に研究所の中へと入る。

外の入り口が自動的に閉まり、階段は一瞬暗くなるが明かりがつく。

階段を降りると巨大な扉があり、東が再び暗証番号を入力すると扉が重々しく開く。

2重に鍵を掛けているようだ。

「東さんの研究所へようこそ！」

「これが……」

研究所を見渡すと、沢山の資料や機材などが沢山保管されている。  
中央には造りかけらしい I S が立っていた。

「束さんつてば世界のアイドルみたいでさ、過激なファン達が私を追いかけててウザい  
からこうして密かに研究してるんだ！」  
「確かにしては盛大だね・・・」

「I S 造ってるんだもん！」

「それもそうか」

過激なファンというのは恐らく各国のお偉いさん方の事を指しているのだろうか。  
千冬が言うには彼女の技術が欲しいなどの理由で各国の人たちが束を探し回つてい  
るらしい。

突然、人の気配を感じたゲンは担いでいたアサルトライフルを構える。

「誰だッ!!」

「ッ!?」

ゲンが銃を受けた先には・・・銀髪の少女が立つていた。

「女の子・・・?どこかで見たような・・・」

「クーゆん!!」

束が銀髪の少女に抱きついた。

彼女は束の知り合いだと思ったゲンは向けていた銃口を降ろす。

「東様、お帰りなさい」

「うん、ただいまクーちゃん！」

「ところで東様、そちらの方は・・・？」

「そうだつたそうだつた！ 彼はゲン、MSのパイロットなんだ！」

「モビル・・・スース？」

それ以上喋らせるとマズいと思つたゲンは口を開く。

「束、彼女はいつたい・・・」

「この娘はクーちゃん！ ご飯作ってくれたりとか色んなことしてくれるとか可愛い娘だよ

！」

「研究所での同居人つてことだね」

「うん!! 可愛いでしょ!!」

「あ、ああ・・・ そうだね」

ゲンは苦笑いしながら束の質問に答えた。

すると銀髪の少女がゲンに近づく。

「・・・ クロエ・クロニクルです」

「え、ああ・・・ ゲン・タチバナです」

急な自己紹介で戸惑いながらもお互に自己紹介をする。

とても落ち着いた娘で可愛い。

しかし常に目を閉じている、目を怪我したりして見えないのだろうか？

「クーちゃん、突然なんだけどこれから引っ越しだよ！」

「引っ越し・・・ですか？」

「うん！ 束さん、漸く自分の戦いを見つけたんだ。その為にはまず拠点を移す必要があるんだよね、事情は後で話すから手伝ってくれるかな？」

「・・・分かりました、束様についていきます」

「ありがとうございますクーちゃん！」

嬉しさのあまり興奮した束はクロエという少女に再び抱きつく。

「・・・ん？」

クロエは先程彼女についていくと宣言した。

つまり・・・彼女も艦に連れていくという事だらうか。

そう考えたゲンは額に手をあてる。

「艦長・・・すみません、更に負担を掛けそうです・・・」

ゲンは艦長にこの事をどう報告しようかと考え始めた。

# 遠くなる島、それを眺める少女

研究所にあつた機材等の積載作業を始めてから2時間経過。

リエに頼んでベースジャバーをMSごと研究所の入り口前に持つて来て貰つた。

彼女がクロエと対面したときは2人して口を開けてフリーズしていたのでゲンはどうすればいいのか分からずとりあえず放置。

ベースジャバーに取り付けられたコンテナの中に必要なものを載せていく。

荷物が思つていた以上に多かつたので全部入り切れるのか不安だつたが、うまく整頓しながら積載したので無事全部載せることができた。

あとは着替え等の日用品をコツクピットにポン投げするだけだ。

クロエと名乗る銀髪の少女から荷物を受け取りコツクピット下部に積載する。

「・・・あれ、これだけ?」

「・・・はい」

「ああ・・・そなんだ、了解」

普通生活していたら着替えや日用品とかは大きな段ボールが2箱くらいになる。  
・・・まあ人によるが、女の子にしては少なすぎる。

なぜならクロ工が持つてきた荷物は大きなキャリーケース1個だけだから。これにて作業は終了、あとは撤収して艦に戻るだけだ。

機体から降り束がどこにいるのか周囲を見渡す。

「… 束様なら研究所の中にはいます」

クロ工が教えてくれたと同時に束が研究所から出てきた。

スキップしながらこつちに向かってくる束の手には… なにやら怪しげなりモコンが握られていた。

「おつまたせ〜!! ここで作業は完了かな！」

「うん、作業が終了したのは分かった。… けどその手にある怪しげなりモコンは何？」

「ん〜? これのことかな?」

彼女はリモコンを堂々と見せつける。

リモコンの中央にボタンには核マークが刻まれていた。

「いやいやまずいだろ?」

こうも簡単に核が出て来た事に驚いたのはもちろん、彼女が研究所だけじゃなく島そのものを消滅させる気満々だったことに物凄く驚いた。

理工もMSのメインカメラのズーム機能を使い束の持つリモコンを見てドン引きし

ていた。

「研究所を跡形もなく消すにはこれしかないんだよ！悪用されたら困るから！」

「それはそうだけどさ・・・！」

「さあさあ！早くこの研究所を消し飛ばしたいから避難しよつか!!」

そういうて束は膝について待機しているスタークジエガンへとダツシユ。

そんなハイテンションな彼女を歩いて追うクロエ。

「世界遺産かもしれない遺跡の改造に地下建設、ついには島ごと核で消滅。・・・これなんて報告すればいいんだろう」

「・・・私は何も見てないし知らないわよ？」

リエの操るスタークジエガンが頭部を横に動かし顔を逸らす。

「おいこら、MSの頭部を使って顔を逸らすんじゃない」

「いい天気ねえ！」

ダメだ、完全に現実逃避している。

「おーい！何やつてんのさ！早くしないとゲンも蒸発しちゃうよ〜？」

「なんて物騒な・・・」

考えるのをやめたゲンはMSに乗り込む。

リエから補助席を借りてコックピットシートの横に取り付ける。

そこにクロエを座らせる。

「揺れるからシートベルトはしっかりと締めて」

「・・・分かりました」

束はすでに準備完了。

準備ができたのを確認したゲンはMSを起動、動力が始動し駆動音がコツクピットに伝わる。

コツクピットハッチを閉鎖し、収納されていたモニターが正面に展開される。展開されたモニターに機体ステータスが表示され異常がないことを確認。

周天囲モニターが外の周囲を映し出す。

地上に敵らしき者はいない。

隣にはリエのMS。

味方なので友軍マークが表示されリエの機体を捕捉し続けている。

機体をベースジャバーに乗せ上昇、一定の高度に達したので発進する。

「これより帰隊する」

〈ノーベンバー4了解〉

操縦桿を軽く握り、フットペダルを踏んで前進を開始した。

徐々に島が遠くなっていく。

クロエはその島を眺め続けていた。

「さて、距離も充分離れたからやつちやうね」

「本当にやるんだ・・・。けどクロエが名残惜しそうに眺めてるから待つててあげなよ」

「いえ、私は・・・」

「それもそつか。くーちゃん、やつぱり離れるのは嫌だつたかな?」

「私は大丈夫です、気にせず行つてください」

それを聞いた束は頷き、離れていく島を見つめながら手にしているリモコンのボタンを押した。

その後、島が消滅し世間は大騒ぎとなつた。